マ　レ　イ　シ　ア

平成4年2月23日～3月4日

財団法人　ユースワーカー能力開発協会

1. 調査チーム派遣概要

1－1 調査チームの構成

氏名／性別／年齢　上段：現住所／下段：所属

① 岡　有一（男）42　東京都板橋区赤塚６－35－25
（チームリーダー）　（財）ユースワーカー能力開発協会
＊中央実施協力団体実務担当者

② 山根　利通（男）37　東京都荒川区東尾久８－45－４－801
東京電力㈱国際交流推進室
＊21世紀のための友情計画」研修協力担当者
シンガポール勤労青年合宿セミナー参加者（1989）
第１回，第２回アセアン・日本ユースキャンプ参加者

③ 榎本　竹伸（男）32　東京都調布市国領町５－63－10
（財）ユースワーカー能力開発協会
レクリエーション指導員
＊マレイシア勤労青年合宿セミナー
レクリエーション講師(1991)

④ 大作　敬一（男）30　東京都墨田区亀戸８－12－４
㈱ダイテツク
＊「21世紀のための友情計画」合宿セミナー協力者
シンガポール勤労青年（1989）
スリランカ・モリディブ教員（1991）

⑤ 筒井　功（男）36　高知県高知市旭天神町308
高知県国際交流協会
＊地方実施団体実務担当者
マレイシア勤労青年（1991）

月　日	日　　程
2／23（日）	成田空港よりマレイシアへ出発（JL721） マレイシア　クアラルンプール　スパン空港到着 空港にて昼食会 歓迎夕食会、市内散策
2／24（月）	JICAマレイシア事務所訪問 文部省カリキュラム開発センター（CDC）訪問 マラ工科大学語学センター（日本語科）訪問 クアラルンプール市立博物館見学
2／25（火）	ヌグリスンビラン州青年スポーツ局を訪問。 職業訓練所見学 ポート・ディクソン見学。
2／26（水）	ゲンティン・ハイランド（レジャー施設）見学 王宮、モスク見学。
2／27（木）	環境省訪問 森林研究所（FRIM）訪問 マンティン慰霊碑訪問。
2／28（金）	クアラルンプールよりペナン島へ移動（航空機） ペナンのPAMAJAメンバーの歓迎昼食会 ホームステイ 各ホームステイ家族合同歓迎パーティー
2／29（土）	ホームステイ ホームステイさよならパーティー
3／1（日）	ホームステイ ペナンよりクアラルンプールへ移動
3／2（月）	人事院（PSD）訪問。 PAMAJAスタッフとミーティング 日本大使館訪問 さよならパーティー
3／3（火）	自然公園、市内見学 帰国（JAL722便）
3／4（水）	成田空港着

● 行動記録

2月23日（日）

7：30　成田空港集合

集合場所を「JALのカウンター前」と決めていたが，実際には同カウンターが何カ所もあり，なかなか落ち合えず時間がかかってしまった。

空港は出国する人たちで大混乱であった。

10：15　成田空港発（JAL721便）

約7時間のフライト

16：30　スパン国際空港着

・PAMAJA（パマジャ／マレーシアの同窓会組織）の会長であるオマール氏を始め，PAMAJAメンバーの大歓迎を受けた。

・オマール氏が空港の税関勤務ということもあり，スムーズに入国手続きを済ますことができた。

・空港で簡単な歓迎昼食会を開いてくれた。（ビーフン料理と果物）

18：15　ホテル着（ホリデイイン・オンザパーク）

19：00　簡単な打合せを行なう

20：15　～レストラン「エデン」にて歓迎夕食会。（約2時間）

・食事を取りながら，今後のスケジュールの確認，第3回ユース・キャンプの打合せ，懇談等を行なった。私たち5名の他，出席者は次のとおり

PAMAJA会長　Omar氏
〃　事務局長　Mokhtar氏（防衛省勤務）
〃　事務局次長　Razali氏（空港管制局勤務）
〃　財務担当　Iskandar氏（銀行勤務）
JICAマレイシア事務所　草野忠征次長
人事院東方政策課（PSD）Wahab氏（青年招へい事業の担当者）

・夕食会にはOmar会長のご家族も出席。この日はオマール氏の娘さんの誕生日であった。モクタ氏には5人目の子供がこの9月に生れる予定。モクタ氏によれば，2020年までに先進国の仲間入りを目指すマレーシア政府が，経済成長に必要な人手確保のため，現在多産（5～6名）を国民に呼び掛けているとのこと。

22：15　～市内散策

・Mokhtar 氏，Razali 氏，Iskandar 氏が案内。

・市内の主要箇所が夜間の照明でこうこうと照らしだされており，とてもきれいであった。まさに「City of Light」であり，一同感動。ただその一方で，資源のムダ使いとの印象も受けた。祝祭日に当るこの日，連邦政府庁舎前の広場では深夜にも関わらず，子供たちによる学校対抗歌合戦が行なわれていた。「荒城の月」も演奏されていた。昼間では暑すぎてこのような行事ができないとのこと。

23：30　ホテル着

2月24日（月）

8：30　ホテルロビー集合

Mokhtar 氏，Ismail 氏，Sahariman 氏が迎えに来てくれた。〔Ismail 氏はパハン州のユース・クラブの会長であり，片道車で3時間（往復6時間）の道のりをわざわざ出迎えに来てくれた。この日を含めて5日間も私たちに付き添ってくれた。シャハリマン氏は，教職のかたわら，マレーシア・日本間のホームステイ・プログラムを現在手掛けている。〕

9：00　～JICA マレイシア事務所表敬訪問

10：30　草野次長から，マレーシアの概況，マレーシア政府の東方政策，日本の協力事業の概要等について説明を受ける。

10：45　～文部省，カリキュラム開発センター（CDC）訪問

12：20　・副理事長以下，計6名の方々が対応。

・副理事長のプレゼンテーションの後，小学校担当，中学校担当の職員がそれぞれ説明。最後に質疑応答。

12：30　～昼食（於：プラザ21のコンベンション・ホール）

14：00　・バイキング方式の会食。参加者約20名。多くの PAMAJA メンバーが勤務先から駆けつけてくれた。

14：20　～マラ工科大学語学センター（日本語科）Razak 講師を表敬訪問

16：00　・Razak 氏は現在，青年招へい事業で日本を訪問するマレーシア青年たちの出国前日本語教育を担当。

・同氏は日本に留学中に被爆，当時のことに話題を及ぶととても苦しそうな表情をされた。

厳しい教育指導方針を持つ教育者であった。

16：30　～マレイシア市立博物館見学

17：00　・博物館そばの屋台で，クドンドン（すももに似た果物）を試食，クドンドンは妊婦の体に良いと説明された。

17：15　～軽食

18：00　・メニューはロティチャナイとティー。これ以降メンバー全員ロティチャナイの味忘れられず。

・店員さんのロティチャナイの焼き方，ミルクティー（ティータリク）のいれ方，いずれのテクニックも見事。一同感心。

18：15　～ホテルにて休息

20：00　ホテルロビー集合

20：30　～PAMAJA 会長 Omar 氏宅にて，夕食会。

・Omar 氏はマレーシアの大学にて経済学を専攻。卒業後税関に勤務。1989年，文部省の奨学金により来日，静岡大学にて行政学を学ぶ。

・室内には多くの装飾品が飾られていたが，特に日本の刀剣類が私たちの目を引いた。

22：30　ホテル着

2月25日（火）

7：30　ホテルロビー集合

Ismail 氏，ラム氏が出迎えてくれた。通訳の Athimoolam 氏と共にホテル発，一路セレンバン市へ。途中，ベトナム難民収容所，日本企業の工業団地など車窓から見えた。

8：50　～セレンバン市のヌグリスンビラン州青年スポーツ局を訪問。

11：30　・副局長の Ong 氏，青年招へい事業で来日したことのある経済開発担当の Shariff 氏，同じく来日した中国系女性 Lim さん，今年青年招へい事業に応募する Hsnan 氏他の方々が対応。

懇談後，旧庁舎見学。

12：15　～昼食（於：ゴルフ場のゲストハウス）

14：00　・当ゴルフ場の会員券は，日本円で約10万円とのこと。

・食事は中華料理。Ong 氏との話がはずみ翌日の夕食の招待を受ける。

14：45　～職業訓練所見学

15：45　・ヤシの実をごちそうになる。実の内側の果肉は，杏仁豆腐に似てる。

・見学の最後に，手作りの造花をプレゼントされ，一同感激。

16：00　～ポート・ディクソンを訪れ，海辺にて地元の子供たちと交流。

17：00

この後，私たちの目的のひとつであった，戦時中の中国人犠牲者のためのマンティン慰霊碑を訪ねるため，PAMAJA メンバー（マレー系）に頼んでマンティンに赴き，警察署（マレー系）にも尋ねてもらったが，結局所在地案内されずに終わった。〔実はすぐ近くにあったのだがこの慰霊碑を管理している委員会の案内人（中国系）が不在のため。〕

慰霊碑を探す途中，ゴムのプランテーション農場に遭遇。ここを見学した。農場のインド系の人たちは，日本人の突然の来訪に驚いた様子であったが問題なく見学することが出来た。

20：00　クアラルンプール市内着

20：15　～屋台広場にて，PAMAJA メンバーと夕食

21：30

21：45　～PAMAJA メンバーがチャイナ・タウンを案内してくれた。

22：30　これでホテルに帰れると思ったら，「カラオケか，ディスコへ」と誘われた。（内心ホテルで休みたかったのだが，「これも彼らもてなし仕方なのかも知れない」考えディスコへ行くことにした。）

22：45　～ディスコ

0：00　日本でいうところのディスコではなく高級クラブのダンスホールといった感じのところに案内された。彼らが来日したとき，恐らく日本人にこのような所に連れて行かれたのであろう。日本人は誰でもが「カラオケやディスコが好きなのだ。」と思っているようだった。残念ながら今回の私たちに限っては，何れも好みでなかった。

案内をしてくれた PAMAJA メンバーも楽しそうな様子でなく，何か無理があったようなので次回から断わる事にした。

0：15　ホテル着　　連日の深夜までのプログラムに，全員疲労困憊。

2月26日（水）

9：30　ホテルロビー集合 Mokhtar 氏，Ismail 氏出迎え，途中ラザリ氏合流。

10：30　～ゲンティン・ハイランド（レジャー施設）訪問

13：30　昼食のカレー料理は非常においしかった。

14：00　～

14：45　岩壁鍾乳洞に作られたヒンズー教寺院を訪問

道端でのドリアンの収穫に遭遇。全員で試食。

15：15　～クアラルンプール市内に戻り，王宮を見学。

15：45

16：00　～モスク見学

16：30

16：45　～　セントラル・マーケットにて買い物

17：30

19：00　ホテルロビー集合

19：30　～青年スポーツ省のOng副局長（中国系）に夕食（中華料理）を招かれた。

21：30　・中国系のOng氏には，マレーシアにおけるマレー人優遇政策に対する不平，不満を時おり聞かされた。

・職場（ヌグリスンビラン州青年スポーツ局）においても，中国系職員が2人しかいないため，マレイシアの政治に対する風刺は次のとおり

(1)マレー人の政党（与党）であるUMNO－ United Malay National Organization（統一マレー人国民組織）は，You must not oppose. の略。

(2)中国人の政党（与党）であるMCA － Malaysian Chinese Association（マレー華人協会）は，Money controls all. の略。

(3)インド人の政党（与党）であるMIC－ Malaysian Indian Congress（マレイシア・インド人会議）は，May I come？の略。

・マンティン慰霊碑について尋ねると，Ong氏は慰霊碑を管理する中華義山管理委員会の人たちに，連絡をとり私たちの同碑訪問についてのアレンジを依頼してくださるとのこと。

22：00　ホテル着

22：30　～岡リーダーの部屋でミーティング

23：30

2月27日（木）

8：30　ホテルロビー集合　Razali氏，Ismail氏，Rahman氏，Rahimahさん（マレイシア航空勤務）が迎えに来てくれた。

通訳のAthimoolam氏も同行。　PAMAJAのメンバーの一人であるRahman氏（地域開発公社勤務）から，一昨日私たちが辿り着けなかったマンティン慰霊碑に本日再び私たちを案内してくださる旨，提示があった。

これを受けてヌグリスンビラン州青年スポーツ省のOng副局長に連絡をとっ

たところ，Ong 氏も今日，中華義山管理委員会の人たちと一緒に現地で私たちに合流してくださるとのこと。

9：20　～環境省訪問

10：30　・3名の職員が対応してくださった。

11：20　～森林研究所（FRIM）訪問

14：00　・副所長による説明のあと，博物館見学。さらに厚生施設にて昼食もごちそうになる。

・JICA 専門家石原氏が同席。

・説明を受けた会議室は，スライド映写用の固定スクリーンも備わっており，立派な設備であった。

・構内は木々の緑と鮮やかな花の色で満たされており静寂でとても美しい。

15：00　マンティンに向かう途中，慰霊碑に捧げる花を買う。

16：20　マンティン慰霊碑訪問。

・ワン氏は1時間前に到着。中華義山管理委員会の人たちと一緒に私たちを待っていた。

・委員会の人たち（7名）の案内で慰霊碑に到着。説明に聞き入ったのち，慰霊碑に黙祷。花を捧げる。

・最後に，委員会の代表である梁氏から私たちの所属，来訪目的，感想などを聞かれ，同氏は私たちの応えをテープレコーダーに録音。私たち一同の緊張はピークに達した。

・委員会の人たちから，当時の日本軍の残虐行為を物語る数々の資料を提示されたが，そのほとんどをワン氏の協力で日本に持ち帰る事ができた。

・慰霊碑訪問の後，近くの喫茶店で委員会の人たちから更に詳細な話を伺った。喫茶店では，終戦と共にただの紙切れとなった旧日本軍発行の現地物資調達のための紙幣も見せられた。

18：00　マンティン発

・慰霊碑に辿り着くまでに，引率・同行を申し出てくれた PAMAJA のメンバーをこれ以上煩わせていいものかどうか，私たち一同の間で意見が対立する場面もあったが，とにもかくにも大きな目的を達成し，帰途に着く。

・「このような悲劇を二度と繰り返してはならない」

「戦争のこの悲惨な事実を語り伝えなければならない」との思いを全員痛感しながらの帰途であった。

この慰霊碑訪問はまさに貴重な体験であった……。

19：00　ホテル着

19：40　ホテルロビー集合

Menet 氏（農業省勤務）がわざわざ挨拶に来てくれた。

20：15　～セントラル・マーケットにて買い物

21：15　～チャイナ・タウンにて夕食。

22：45　・マレイシアにおいて最初で最後の，メンバー５人だけの夕食であった。

・慰霊碑訪問の緊張感から開放され，ビールの味がとてもおいしく感じられた。

・双成企業㈱の人たちと知り合いになり，楽しく懇談。

23：30　ホテル着

２月28日（金）

8：30　ホテルロビー集合　Rahman 氏出迎え，スバン国際空港へ向かう空港で Rahimah さんが見送りの出迎え。

喫茶店にて懇談。※フロート・ビア（ビールの味がするフロート入りのソフトドリンク）は珍味であった。

10：55　スバン国際空港発

11：40　ペナン国際空港着

・ペナン島の PAMAJA メンバーの大歓迎を受けた。

・Razali 氏が１日前にクアラルンプールよりペナン島に来ており，わざわざ私たちを出迎えてくれた。

歓迎昼食会のあと，ホームステイプログラムに入る

20：30　公共集会場にて，ホームステイ家族合同歓迎パーティー

・子供たちのマレイシアの伝統舞踊を鑑賞。

・なまずの輪切り料理に一同驚き。なまずはマレー人たちの好物とのこと。

近くには養殖場もあった。

パーティ終了後再びホームステイ家庭へ。

２月29日（土）

ホームステイ（ペナン）

20：00　さよならパーティー

・会場は PAMAJA メンバーの Fauziah さん（女性）宅。

・Omar 会長，Mokhtar 氏も遠路クアラルンプールから車で駆けつけている。

・果物，サテー（焼き鳥），チキン料理と，食べ切れないほどのごちそうであった。

・パーティーの後半は，歌，歌，歌……の連続。PAMAJA メンバー，ホストファミリーと私たちが一体となった楽しい一時であった。
・パーティ終了後再びホームステイ家庭へ。

3月1日（日）

ホームステイ（ペナン）

11：30　地元の人の結婚披露パーティーに招かれた，新郎新婦はまだ来ていない。
・近所の人たちが料理を作り，私たちをもてなしてくれた。婚礼を祝う気持ちはどこでも同じである。
・肝心の新郎新婦には結局会うことが出来ず，あわただしく空港へ移動。
16：00　ペナン国際空港より再びクアラルンプールスバン国際空港へ出発
・PAMAJA メンバー，ホストファミリーの人たちが多数見送りに来てくださった。
・ホストファミリーとの心暖まる3日間を想うと，去りがたき思いは皆同じであった。
16：45　クアラルンプールスバン国際空港着　Menct 氏出迎え。
18：00　～ホテル（ホリデイイン・オンザパーク）のカフェテリアにて，メネット氏，ムラ氏を交え，翌日の打ち合わせ。
20：30　～岡リーダーの部屋で打合せ
23：00　各人がホームステイの思い出を語る。

3月2日（月）

8：30　ホテルロビー集合
9：00　～人事院（PSD）訪問。
10：30　・研修，職業開発局副局長の Abdul Aziz 氏が対応。JICA 草野次長も同席。
10：40　～PSD 事務所にて PAMAJA メンバーと懇談
13：40　PAMAJA 側出席者：Omar 会長，Mokhtar 事務局長，
Razali 事務局次長，Iskandar 財務担当，Menet 氏，
ムラ氏，ゴー氏，アジザン氏（在宅省勤務），ロシタ女史（PSD 勤務）他，
計10名。
・Omar 会長から PAMAJA の活動状況について説明があった。
最後に私たち調査団一人一人が，PAMAJA メンバーの献身的かつ完璧な対応に対し，心からお礼の言葉を申し上げた。

懇談の後，PSDのZabri局長，Aziz副局長，Wahab氏も交えての昼食会。久々の幕の内弁当であった。

14：00　～日本大使館訪問

14：30　・原田二等書記官が対応

14：30　～ショッピングなどした後ホテルへ戻る。

19：00　ホテルロビー集合

20：00　～空港近くのシーフード・レストランにてさよならパーティー

22：00　・JICA小泉所長，草野次長，原田二等書記官，PSDアジズ副局長が参加PAMAJA側は前会長のJamil氏（マレーシア航空勤務）を含め約40名が参加。

・懇談の後，Iskandar氏の司会で岡団長がマレー語でスピーチ。続いてOmar氏がスピーチを行ない，さらに私たち一人一人に記念品が授与される。最後に，メネット氏の音頭により，全員で「今日の日はさようなら」を大合唱。私たちの感動は頂点に達した。

3月3日（火）

8：30　ホテルロビー集合

Razali氏，Ismail氏，Menet氏，Yatiさん（農業省勤務の女性）が出迎え。9名全員がお揃いのPAMAJAオリジナルのシャツを着用。

9：00　ホテル発。

自然公園及びマレイシアで一番大きなモスクを訪問。

・自然公園ではまず，天皇陛下が昨年10月マレイシアを訪問された際記念植樹をされた樹木の前で記念撮影。Yatiさんが陛下の前で五輪真弓の「恋人よ」を熱唱した水上ステージも見学。とても楽しい構内散策であった。

・昼食はケンタッキー・フライドチキンにて。マレーの人たちは手で食べる。鳥肉の骨と肉を上手に右手だけで分離させるYatiさんの手の動きには感心した。

夕刻，政府高官の秘書官であるIbrahim氏が，私たちのために急きょ送別会を開いてくれることになった。

・官庁専属の歌手及びダンサーによる歌と踊りを見学。官庁への重要来訪者に対して随時，このようなもてなしをするとのこと。

・歌手の歌は五輪真弓の「恋人よ」であった。どうも五輪真弓のようなメロディーをマレーの人たちは好むらしい。

・引き続き，官庁の厚生施設にて会食。

Ibrahim 氏による送別会のあと，一路スバン国際空港へ。
数多くの PAMAJA メンバーならびに JICA 草野次長，青年スポーツ局ワン副局長も見送りに来てくださった。名残り尽きぬまま，最後に PAMAJA の Omar 会長，Mokhtar 事務局長，Razali 事務局次長，Iskandar 財務担当と別れの挨拶を交わし，一同搭乗する。
空港税関職員の Omar 氏は，仕事の合間をぬっての見送りであった。

22：45　クアラルンプールスバン国際空港発（JAL722便）
一同，10日間を振り返る。数多くの思い出に包まれた。

3月4日（水）

6：30　成田空港着
一同，貴重な思い出を胸に家路に着く。お互いよきメンバーに恵まれたかけがえのない10日間であった。

1－3　主要面談者

①JICA 事務所

小泉　純作氏	所長
草野　忠征氏	次長

②マラ工科大学語学センター（日本語科）

Mr. Haji Abd. Razak BinAbdul Hmid	マラ工科大学　語学センター講師

③青年スポーツ省ヌグリンビラン州青年スポーツ局

Mr. Ong Leng Kok	副局長
Mr. Sariff Ab. Kadir	経済開発担当

④マレイシア森林研究所

Mr. Hashim Bin Md. Noor	
石原　たつお氏	JICA 専門家

⑤マンテイン中華義山管理委員会

梁　繼生氏	総務担当

⑥人事院

Mr. M Zabri Min	研修・職業開発局長
Mr. Abdul Aziz Yusof	研修・職業開発局副局長
Mr. Wahab Mohd. Yasin	研修・職業開発局東方政策課副部長
Mr. Wan Radhiah Marzuki	研修・職業開発局東方政策課

⑦日本大使館

原田　美智雄氏	二等書記官

⑧PAMAJA（同窓会）

Mr. Chik Omar Chik Lim	会長
Mr. Mokhtar Sulaiman	事務局長
Mr. Razali Raof	事務局次長
Mr. Iskandar Noor Bin Ibrahim	財務担当

2. 調査の要約

2－1　マレイシア同窓会（PAMAJA）の活動状況およびアセアン日本ユースキャンプ（ユースフォーラム）の実行計画について。

・帰国青年同窓会の活動報告の項を参照。

2－2　マレイシアとして青年招へい事業に関する取り組みについて

・マラ工科大学語学センター，人事院及び提言を参照。

2－3　多民族国家の社会状況について

・提言を参照。

2－4　第二次世界大戦の傷跡について。

・マンティン慰霊碑訪問を参照。

3. 現地活動報告

3－1．表敬，訪問先における意見交換内容

①JICA マレイシア事務所

・マレイシアは，国家目標として2020年までに先進工業国を目ざしているが，技術者不足のため，JOCV が不足している人材の穴埋め的な扱いになっていて，いわば労務提供型の協力隊となっている。

・マレイシア政府は，国営企業の民営化を進めているが政府出資に頼らず民活利用をするようマハティール首相は国民に呼び掛けている。

・ブミプトラ政策（マレー人優遇政策）は，最近少なくなってきているようだ。企業が銀行から融資を受けるときの利息の割引優遇など，ブミプトラを期待せずに自立して行くようにマレイシア政府は指導している。

・青年招へい事業の人選について人事院（PSD）の Wahab 氏が，プログラムに対する目的意識を持たせるために，直接訪日青年の面接に当って送りだしている。

PAMAJA（同窓会）は，青年の帰国後に更に深く日本との様々な形での交流を強く望ん

でいる。

②文部省・カリキュラム開発センター（CDC）

・CDCは，マレーシアにおける教育の質向上のために1974年創立。

・マレイシアの教育では，神への信仰を信心を基にして，知的，精神的，身体的調和のとれた人間を育成するために，個人個人の持つ能力を伸ばすための努力を推進している。この努力は，社会と国家の改善に充分貢献できるマレイシア人を育成するだけでなく，高い良識を持ち聡明で有能であり，個人の幸福に到達することが出来るよう責任のある人を育成することを目ざしている。

・小学校及び中学校のカリキュラムを作成，有能な教師を育成するための研修，カリキュラムの利用調査などを実施している。

・サバ州に総合大学を建設計画があり，そこには外国の大学も考えている。

③マラ工科大学語学センター（日本語科）訪問

・東方政策に関連した日本語教育を行なっている。また，マレイシアでは現在日本語の学校と教師が不足している。

・青年招へい事業の出発前の事前研修を実施している。訪日する青年には，日本に企業経営方法や労務管理，労働者の働き方などについて勉強させてほしい，また出発前の事前研修は，訪日青年にとって非常に重要なプログラムなので，日程が短くなっては困るのでその点について考慮してほしいなどの要望が出されていた。

④ヌグリスンビラン州青年スポーツ局を訪問。

・ヌグリスンビラン州の文化・スポーツ協会，523団体に加入している約69,000人の会員のための文化・スポーツ諸活動を同局は担当。

・同局は地域の人たちのための，経済面での援助，融資，コンサルタント業務，それに職業訓練といった経済開発活動も行なっている。

⑤環境省訪問

・マレイシアには広大なスズ採掘跡地が存在するが，そこに可燃物，不可燃物のゴミを一緒に捨て，その上に工場等を建てているとのこと。その一方で，ゴミのリサイクル計画が現在進行中であるとのこと。

・スラム対策について，保障金を支払ってスラム住民を移動させることに抵抗はあるが，安い住宅を建てているので大きな問題にはなっていない。

⑥森林研究所（FRIM）訪問

・ゴムの木，マングローブ，竹，油椰子，ティンバーなどについて主な研究をしている。

・広報活動として，学生やVIPの研究所，資料館の見学説明などを実施。

⑦マンティン慰霊碑訪問。

・この慰霊碑は，戦争中日本軍に虐殺された中国系の人たち約200名の霊を慰めるため「教科書問題」を契機として1985年に建てられた。

・委員会の人たちから，当時の日本軍の残虐行為を物語る数々の資料を提示されたが，そのほとんどをワン氏の協力で日本に持ち帰る事ができた。

・慰霊碑訪問の跡，近くの喫茶店で委員会の人たちから更に詳細な話を伺った。
当時町の中心部からかなり離れたところに住んでいた中国系の人たち約200名に対して，日本軍の監視の目が行き届かず，共産主義に転じ，またイギリス軍に通じる恐れがあったため，これらの人を日本軍が全員殺害したとのこと。
喫茶店では，終戦と共にただの紙切れとなった旧日本軍発行の現地物資調達のための紙幣も見せられた。

⑧人事院（PSD）訪問。

・研修・職業開発局副局長の Abdul Aziz「日本とアセアン各国の青年同志がお互いをよく知る意味で，この平和友好的な『21世紀のための友情計画』を末長く続けて欲しい」との発言があった。

・アセアンは共同体なので，マレイシアの東方政策もアセアン各国と相談しなければ進めて行くことが出来ないので，日本人もアセアンについてもっと勉強してほしい旨要望が出された。

・今回私たち一人一人がホームステイ先で手厚いもてなしを受けたことに触れ，同氏は「マレイシアには，家庭への訪問客は王様であり，幸せな気持ちにしてあげなければならない，との慣習がある」と言及。

⑨日本大使館訪問

・アフターケア調査の目的と報告をし，PAMAJAの受入は積極的で，組織的によくアレンジされ，調査団として好評価をしている旨の報告をした。

・今年の9月に第3回アセアン・日本ユースフォーラムをマレイシアで実施する予定なので主催するPAMAJAに対する協力を依頼した。

3－2　帰国青年同窓会の活動報告

PAMAJA 側出席者：Omar 会長，Mokhtar 事務局長，Razali 事務局次長，Iskandar 財務担当，Menet 氏，ムラ氏，ゴー氏，アジザン氏（在宅省勤務），ロシタ女史（PSD 勤務）他計10名。

PAMAJA は1987年に設立され，

(1)メンバー相互の情報交換（機関紙等の発行による）

(2)21世紀のための友情計画ならびにマレイシア政府の東方政策への協力

(3)マレイシアの文化・教育への貢献，を目的としている。

21世紀のための友情計画への参加者は自動的に PAMAJA の会員になるが，それ以外の人でも日本に関心のある希望者は入会できる。入会費（年会費）は10リンギット（500円）。

現在 PAMAJA メンバーは，1200名おり，その内300名が活発に活動している。活動の内容としては，機関紙等の発行，セミナー，展示会，写真展，スポーツ大会等の開催，メンバーを対象とした日本語コースの開催（現在は中断），日本からの調査団やホームステイ・プログラム参加者への対応などである。

PAMAJA は非常にしっかりした組織であり，極めて積極的に活動しているとの印象を受けた。

次に Omar 会長から，再交流プログラムの日本側窓口を一本化して欲しいとの要望があった。（現在の日本側の同窓会のような組織づくりは困難と回答。）

第３回ユース・フォーラムについて，よりアカデミックな内容とするために，名称をユースキャンプからユースフォーラムに改めたい。ディスカッションの時間をより多く取りたい。トピックは，(1)環境等グローバルな問題，(2)麻薬問題，(3)老人福祉，(4)技術移転，を考えている。期間は９／20～27日（８日間）。クアラルンプールが主であるが，パンコール島へも渡る。参加者数はアセアン各国から10名ずつと日本から20名，計150名を予定。予算としては，できれば20万リンギ（1000万円）を確保したい。

3－3　セミナー・交流会実施状況

セミナーはなし。

交流会は「ホームステイさよならパーティ」及び「アフターケアチームさよならパーティ」の２回。

3－4　ホームステイ実施状況

ペナン島を主に一人一家庭にて２泊３日を実施されたが，団員の一人は２泊とも別々の家

庭にお世話になったため落ち着いてマレイシアの家庭生活を体験することが出来なかったようだ。

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

・ヌグリスンビラン州青年スポーツ省を参照。

5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

・マラ工科大学語学センター，人事院及び提言を参照。

マレイシアの東方政策のひとつにこの事業を捕らえて高く評価をしており，経済発展のために同窓会等の事後活動に期待を寄せているものと思われる。

6. 調査チーム参加者の感想

榎本　竹伸

（ホームステイ）

激しい雨が，窓を叩く音に目を覚ました。

汗が首筋を伝わり，Tシャツの襟に吸い込まれていった。ベッドが幾らか湿っぽく濡れて，それに触れてみると少し冷たく感じた。

ベッドから起き上がり，一歩二歩と部屋の窓辺に近づいてみた。大粒の雨が木の枝を揺らし，庭の花びらを叩きつけていた。

首を一回二回と左右に回して，大きく深呼吸をした。

家の中は静まり返り，物音一つしない。

半開きになっている部屋のドアの向こうは薄暗く，人の気配もない。

私は，そのドアに静かに近づいて，物音をたてない様にドアを開けてみた。そこには，時が止まったような空間があった。テレビの横にきちんと置かれた一台の扇風機が，ただ規則正しく首を振りながら回り続けていた。

その右手奥にあるダイニングテーブルの中心に，籐で出来た縄帳がポツンと置かれていた。その向こうにあるキッチンには，今は主人の姿もなく，ダイニングと共に天上の明りとりから，和らかな光だけが差し込んでた。

耳を澄ませると，シャワー室で水を溜める水道の蛇口がゆるんでいるのであろうか，一滴二滴と規則正しい音が聞こえてくる。室内を見回し左側に目を向けると，そこには花柄のソファーが見えた。部屋を出て，そちらの方へ少しづつ進んで行くと，そのソファーに，ヌルールちゃんの横たわる姿があった。スヤスヤと軽い寝息をたて，昼寝をしている。

ヌルールちゃんは七才，小学校に通う歌好きの女の子。

私は，ヌルールちゃんが休んでいるソファーの前を，玄関に向けて歩き出した。石の床が素足に心地よい。玄関に取り付けられた，白色に塗られた鉄の格子とびら越しに外を見ると，道をはさんだ向いの家が，霞んで見えた。

雨は，まだ激しく道をたたきつけていた。

ホームステイのある日の午後……。

（空港で）

私が，初めてホームステイ先の家族にお会いしたのは，ペナンのバヤン・レパス空港であった。

家族は五人で，父親ハルンさん，母親ハミダさん，長女ヌルールちゃん，二女シャリルちゃ

ん，そして二人の子供のベビーシッターのザナさんであった。

ハルンさんは，警察関係の公務員で，ガッシリした体格でポロシャツ姿が良く似合っていた。日本へ来たことのある「PAMAJA」メンバーのハミダさんは，にこやかでいかにも，やさしそうな人である。長女のヌルールちゃんは，マレー語で名前をハッキリと言い，二女シャリルちゃんは，ハルンさんの足を抱え影に隠れ，照れるように私を見つめた。ザナさんは，初め三人姉妹の一番上なのか？と思ったが，両親が共稼ぎをしている関係上，昼間心配がないように，泊り込みで仕事をしている事が家に着いてから分かった。彼女は十四才，田舎の村からやって来たのだという事も後で知った。

それぞれの人達と，握手を交しながら私もマレー語で名前を伝えた。握手をした時『この人達が私のマレーの家族で，これから一緒に生活するんだ！』と，強く心に感じた。

（ペラ州の我が家へ）

車に乗り込む。

照りつく太陽の下，駐車してあった私達の車は，サウナ風呂のようになっていた。

走り出す車。一気に窓を開ける。と同時にさわやかなペナンの風を受けた。

私は，ペナン島の地図を広げ，隣りでハンドルを握るハルンさんにそれを見せた。

ハルンさんは，横目で地図を一瞬覗くと，左人指し指をその地図の上に置き，今度は右に大きくずらし地図には無い空間を指差した。その位置は地図よりはるか右側で，ハルンさん自身の左足を指す程であった。

「まさか！また半島に戻る…？」

ペナン島が後ろへ後ろへと，遠ざかる。

私の予感が当った。車は，ペナンブリッジを渡っている。とても美しい橋である。全長8.4km，1985年に完成したと教えてもらった。

橋を渡りきると車は右折する。右に行くという事は，即ち半島を南下する事である。

車はひたすら走る。

車窓には，ヤシの木やバナナの木が数多く見られ，時折，民家が現われたと思ったら，突然モスクやヒンドゥ教寺院がその周辺に建てられている。私達の車は走り続ける。

すでに，車内はカーステレオの音楽に合わせて，家族みんなで何かを歌っている。ようく聞くとそれは，「今日の日はさよなら」であった。続いて，五輪真弓の「恋人よ」が静かに落ち着いたテンポで流れてくる。やはりこの曲も彼らのレパートリーらしい。

私も，家族と共に歌い始めた。

すると，家族の歌声のトーンが上がった。

私も，後ろを振り返りながら歌った。

後で家族から聴いた話では，五輪真弓はマレイシアでとても人気があり，天皇・皇后両陛下がマレイシア御訪問の際も，PAMAJA のメンバーが，「恋人よ」を披露したと聞いた。

車が速度を落とし，国道から折れ，住宅街に静かに入って行く。そして，車は止まった。そこは，一般的なマレイシアの住宅である。コンクリート作りで，一軒屋，入口にカーポートがあり，その両脇にかわいらしい花が植えられていた。

ここまでの道程，約70km。

ここまでの所要時間，２時間弱。

半島に渡ってから家までの間，信号３箇所，踏切２箇所。

ペナン州を越えてやって来た，ここペラ州。その州の小さな町の静かな住宅街。

そして，その一角がマレイシアの私の家。

ホームステイが始まる。

（マレイシアの私の家）

私は，まず寝室に案内された。

「自由にくつろいで下さい。」とハミダさんに言われて，何かほっとした。

「とにかく，シャワーを浴びたらいい。」と言うハルンさんの言葉に，私は「ハイ！」と日本語で答えて，シャワーの準備をしていた。Ｔシャツ，短パン，下着とバスタオル etc をバックから取り出し，バスタオルに一包にして部屋を出て行こうとした時，ハルンさんが一枚の布を持って「これはサロン！私の物だけど新しいし，使っていない！だから，榎本シャワーの後はこれを付けなさい！」と差しだしたので，素直にそれを受け取った。しかし，受け取ったものの，その使い方がわからないのでどの様にしたら良いか，手振り身振りで聞いた。

そう，何を隠そう私は，英語・マレー語と『語』と言われる物が大の苦手なのである。

このホームステイでの一番の心配も，言葉であった。相手の言っている事は，幾らか理解できるのではあるが，それに対して何と表現して良いか，いつも困り果てるのである。

「こんな事になるんだったら，もっと語学を勉強しておくんだった！」

誰もが，私と同じ状況にある時，頭の中に浮かんでくる言葉が，やはりクッキリ浮かんできて，「英語」の二文字がネオン灯のようにチカチカと光った。

とにかく，サロンの使い方はわかった。

サロンを持ってシャワー室に入る。

そこは，シャワー室と言っても，要するにその部屋の片隅に，タイルで作られた腰の高さ程の水槽があり，水道の蛇口がありその水槽を満たしていて，その水をプラスチックでできたひしゃくで汲み，体の汗を流すというものである。

私は，頭から一気に水を被る。

ほてった体が，その瞬間和らいでいた。

私は，何度も何度も頭から水を被った。

「どうもありがとう。」「テリカマシ。」と言いながら，サロンを巻きリビングに現われた私を，家族全員が目を丸くして見つめている。「どうですか？」と私が尋ねると，全員が一斉に笑い出した。そして，口々に「バイク」だとか「Good」だとか言いながら，笑い続けている。特に，ザナさんとヌルールちゃんは床にしゃがみ込んで，お腹を抱え，シャリルちゃんは，私の下に走り寄って来て，サロン姿の私のお尻を「パン！パン！」と叩いた。（どこか，おかしいのかなぁ？）と思いながら「まあ。まあ。」と日本語で答え，両手で家族の笑いを押さえる仕種をしながらサロンの裾を股にはさみ込む様にして，床に腰を下ろした。

「Baik」「Baik」（いい。いい）サロンは，とても気持ちが良い。

キッチンから強烈とも言える，あまい香りがしてくる。私は立ち上がり，キッチンを覗きに行って見た。

一つのホーロー鍋が火にかかり，中でジャガイモの様な物が，グツグツと音をたて踊るように煮えている。あの強いあまい香りが，私の鼻を突き刺す。

「これは何ですか？」と英語で私。

「これは，バナナよ！」とハミダさん。

「へー。」と日本語で私。

「これは，グリーンバナナで，シュガーといっしょに煮ている。」とヒミダさん。

「Ini Pisang manis」とマレー語で私。（このバナナあまいですか？と質問したつもり。）

「少しだけ，あまい。とてもおいしい。」と英語でハミダさん。

「そうですか。」と日本語で私。

「そうです。おいしいです。」とハミダさんは，日本語で答えて，右手に持った木ベラで，鍋の中で踊るバナナを取り出し，私の目の前に差し出した。（じぃーと。）見つめる私に，「トライ！」とハミダさん。私は，バナナを右手で摘むと一気に口に運んだ。

「熱い！」声にならない声が出た。

ハミダさんが，あわてて鍋の横に置いてあった，コップを手渡してくれた。一気に飲み込んだ。私は，いつも左手に持ち歩く，マレシア語の会話本をあわてて，ペラペラとめくる。（じっーと見つめているハミダさん。）

やっと見つけた一つの言葉を，待っているハミダさんに伝えた。

「Panas！」（熱い！）

ハミダさんは，ニコッと笑いながら，右手に持つ木ベラで再び鍋をかきまぜた。

家族全員が，ダイニングテーブルに集まりバナナの砂糖煮をそれぞれが皿に盛った。

ヌルールちゃんとシャリルちゃんは，ニコニコしながらうれしそうにバナナを見つめてい

る。ハルンさんがグラスにコーヒー（マレイシアでコーヒーと言えば，砂糖いっぱいのミルクコーヒーのKopi（コピ）が一般的で，ブラックコーヒーのKopi－O（コピ・オー）は滅多に飲まない様子である。）を入れてくれた。ハミダさんの日本語による「いただきます。」で全員が「いただきます。」の日本語。

楽しいおやつのひと時。

シャリルちゃんが，何かモゴモゴ言いながら姉のヌルールちゃんのお皿をスプーンで叩く。今度はヌルールちゃんが，シャリルちゃんを（何よ！）とばかりに軽く押す。「ワァー！」と言って泣くシャリル。スプーンがシャリルちゃんの手を離れて，ヌルールちゃんの膝の上に落ちた。（どうも，盛り付けたバナナの数が違っていたので喧嘩になった様子である。）すかさず，ハミダさんがそのスプーンを取り上げて，シャリルちゃんの目の前に出して，きびしく注意して右手に持たせた。そして，ヌルールちゃんにも一言付け加えて席に着いた。その時，ハルンさんは終始その成り行きを，静かに見守っていた。

マレーも日本も，子供は同じ。そして親も同じである。何か心暖まるものを感じる出来事であった。

（言葉）

私は，語学がダメである。

マレー語・英語で相手の言っている事を理解し，それに対して自分自身が思っている事，考えていることを上手に会話の中で表現する事など私にはできない。

もし万が一，スラスラ会話ができ，楽しめるような事があったのなら，ペナン島が驚いてシンガポールあたりまで落ちてしまうであろう。今回のホームステイで，一番恐ろしく心配だったのが会話であった。

私は話す時，英語・マレー語そして相手が知っていると思われる日本語を，ミックスさせて会話をした。すると，来日した事があるハミダさんも，私が理解しやすいように，単語を選びゆっくり話してくれた。ハルンさんも一度ハミダさんに尋ねて，確認してから英語で話をしてくれる。そして，マレー語ではこの様に言うとお知えてくれる。それでも私が理解できないと，ハミダさんの片言の日本語が飛び出す。

マレー語の本，英和・和英辞典が置かれ，どうにか話が進むという状態であった。

そして，三人が互いに理解できた時，それぞれが自分自身にもう一度確認し，それぞれの目を見つめながら，ニコニコ笑って一件落着となるのである。

単語プラス，身振り手振りそして，辞書と共に持ち歩くメモを使っての字と絵，可能な限りの方法で理解を深めた。

この様に，ホームステイでの会話は，会話では無い会話であったと言える。

しかし，今こうして考えて見ると，やはり言葉の問題は大きい。

あの時，もっと理解し合えば，もっと違った，もっと進んだ深い話ができたに違いないと思う。

より生活に，密着し，ホームステイ先の近隣の人々ともその土地の話をしたり，日本を紹介したりして，コミュニケーションを計り，理解する事が可能であった思う。

やはり，言葉は相手を理解し，自分自身を表現する上で，無くてはならないコミュニケーションの第一歩であると，強く感じた。

（家族会議）

さて話は，おやつのひと時に戻る。

バナナを頂きながら，これからの予定を家族で話し合う。

ハルンさんとハミダさんは，（今日はどこどこへ行って，明日はあそこへ行って）と話し合っている。

「湖へ行こう。」

「海がいいんじゃない！」

「釣へ行こう。」

そんな会話のやり取りの途中で，子供が「湖に行きたい。釣はやだ。……。」と口を挟む。

そして，ハルンさんはこの私に聞いた。

「榎本さん，あなたは何をしたいですか。」

私は少し考えた。

（せっかく，ここまで来たのだから大好きな釣もしてみたい。湖も見てみたい。青空の下，せっかく持って来た水着で泳ぎたい。）

しかし，私の答は決まっていた。

（この家に着いた時から，この家とこの近くでのんびりしたい。なぜならば，この家は，ペナン島の町まで２時間，夜はそのペナン島で夕食会があり，私の家の子供達も出席する。こんな小さな子供が何時間も車で移動する。夜も遅くなるだろう。移動時間も，もったいない。それに，私はこの家が好きだし，家族も好きだ。私も二人の子供を持つ父親，マレーの自然な家族を見たい！接したい！）

「ハルンさん，私は家族と一緒にここに居たい。あなたは，時間になったらモスクへ行く。私はこの町をブラブラする。みなさん，いつもと変わらない生活をする。その中に，私がいる。だから，無理して観光したりする事は必要ない。」と辞書を片手に，どうにか答えた。すると，ハルンさんが，「気を遣うな！どこかへ行こう。」と言う。私は，「子供達と公園に行きたい。」「皆さんとゆっくりしたい。」とソフトに答えた。

ハルナさんハミダさん，そして子供達も解ってくれた様子である。良かった。

ようやく二泊三日の予定が決まった。

一日目（これから）

おやつ後，家の周辺に散歩に出かける。

夕方5時に夕食会のため，家を出発。

（PAMAJA のメンバーと共に，民族芸能を見ながらの食事。）

二日目

一日中，家とその周辺で遊ぶ。

午後3時に家を出発。途中，ハルンさんの友人（イスマイルさん）宅に行く。

夜，さよならパーティー参加。

三日目

朝食後早目に出発。ペナン島で観光・ショッピング。結婚式見学後空港へ。

以上の様に，私の希望を充分に入れてもらい，とてもうれしいこと，感謝している事を家族に伝えた。

それからの時間，私はサロンを身に付けたまま，夕食会に出かけるまで，のんびりと家の中でくつろいだ。

ゆっくりと時が過ぎる中で，「皆んなに悪い事したかなぁ。でも，これで良かった。」とつくづく感じながら，ハルンさんとリビングで，食後，いやおやつ後の一服をした。互いに煙草を交換し，「これは味がいい。」「少しきついなぁ。」などと言いながら，煙草談義になった。気が付くと子供達は，テレビから流れてくる音楽に合わせて，元気よく歌い踊っていた。今度は，ハルンさんと子供の話になった。誰でも子供の話になると，笑みがこぼれ，心を開けるものだと感じた。

私もこの頃になると，歌を忘れたカナリヤから，店先に置かれた九官鳥のように，少しだが言葉が出る様になっていた。

（夕食会）

夕方，予定通りに夕食会のために，ハルンさんの運転で，また2時間かけてペナン島へ向かう。

歓迎夕食会は最高に楽しかった。

砂地に建てられた，鉄パイプ・トタン屋根のオープンスペース。プラスチックのイス，折りたたみテーブルそして白いテーブルクロス。足元は心地よい砂のクッション。

そして，プレハブの様な素朴なステージ。

陽が落ちた空を見上げれば，星が輝き，風に誘われたように，ヤシの木が揺れている。

（南の国，南の島，ペナン）

私が想っていた，素朴なマレーシアがそこにあった。

民族音楽の演奏が始まる。

民族衣装を身にまとう少女達の踊り。

体で本当の音楽を感じて，右へ左へと舞う少女達を目で追った。

やわらかな風が，通り過ぎる。

言葉にできない，素晴らしい夜。

忘れられない最高の夜。

（戦争）

あくる日，水浴びの音に目を覚ます。

部屋から，サロンとTシャツ姿で出て行くと，ハルンさんがサロン姿でバスタオルを首からさげ，煙草をふかしていた。

私も，目覚めの一服となる。

その後，水浴びする。

一日の始まり，気が引きしまる。

朝食は，ロッティ・チャナイ（クレープ風に焼いたパンケーキのような物を，カレー汁に付けて食べる。）と，ビーフン炒め，そしてコピとオレンジジュースである。

右手と指でロッティ・チャナイをつまみ，ちぎってカレー汁に付けて口に運んだ。

「Good！」とハルンさん。

私も，いつの間にかスプーンとフォークを使わなくなっていた。

朝食後，ハルンさんは「仕事に行ってくる。すぐ戻る。」と言ってオートバイで，出かけて行った。ハミダさんは，食事の後かた付けを始めている。

私は，ザナさんが持って来てくれた新聞を広げて見る。新聞まで辞書を引いて読む気力がなくて，詳しい内容が解らないまま折りたたみ，テーブルに置いた。

煙草に火を点けた。

ザナさんが，私の後ろを通りゴチャゴチャとハミダさんに声をかけると，家を出て行った。と，思っている間に，二匹のアジを持って帰って来た。ニコニコしながら，その二匹の尾を持って私の目前に出し，ゆっくりした口調で「ikan tenggiri」と何度も繰り返し言う。すると，子供達もイカン・テンギリとザナさんに合わせて言う。イカン・テンギリコールが始まった。

私は負けじと，「アジ，アジ…。」と繰り返しコールした。国際親善，魚コール大会。

これでまた，昼食が楽しみになって来た。

二人の子供達は，絵を描く事も好きである。特に，ヌルールちゃんは日本で言う，絵描き

歌のコックさんに似た，絵をよく書いている。そんな二人の前に，レポート用紙とハサミ，エンピツを置いた。縦長のレポート用紙を正方形にするために，三角に折り残った部分をハサミで切り落とした。二人は私の手元を覗き込みながら，正座してジーとしている。私は，その紙を折って鶴を作った。

そして，つぎつぎにせみや飛行機・かぶとなどを折った。二人は目を輝やかせながら，それを持って飛び跳ねていた。

自分自身で折った鶴を持ち，母ハミダさんに見せに行ったヌルールちゃんは，得意そうな顔を見せた。

その間に，私は折り紙を作り始めた。

レポート用紙を三角形になるように折り，外の余分な部分を丸くカットする。そして，左右の直線の折り目部分に，三角や丸型のカットをハサミで入れる。そして最後に，その紙を元の一枚に広げると，美しい花びら模様になる。私が切り終わった紙を一枚に広げた瞬間，シャリルちゃんの手が私の手元に見えたと思ったら，あっという間に消えた。

「キャーキャー」と騒ぎまくるシャリル。

「ギャーギャー」と泣きわめくヌルール。

一枚の紙が，戦争を巻き起こした。

切り紙を左手で後ろに隠し，右手で床にあったハサミを持ち振り上げたシャリル。

そのハサミを，左手で奪い取るようにつかむヌルール。右手はシャリルの背中にある切り紙に突進する。

二人は，重なり合いながら泣きじゃくる。

「STOP！」

私は，つい力が入ってしまった。

気が付くと，キッチンに居たはずの，ハミダさんとザナさんが私の後ろに立っていた。

ハミダさんが二人の意見を聞いている。

泣き続ける二人は，言葉にならないような声で，相手に構わず同時に訴える。

ザナさんが二人の中に割って入った。

二人は，ようやく引き裂かれた。

ハサミという武器を置くシャリル。

戦争の原因となった切り紙も，無残な姿になりハサミの側に並んだ。

和平会談の議長となった私は，つぎのような内容を発表した。

1. 切り紙は一人二つずつ私が作る。
2. もっとほしい人は，自分で作る。
3. 喧嘩はしない。

以上の三点であるが，この会談はほんとうに言葉に苦労した。会談が閉会を迎え，私は煙草を一本取り出し火を点けた。(ホォー)

その後，小競り合いがあったものの，約束の切り紙二枚ずつ手渡した時，この二人の姉妹は互いに握手を交わし，終戦となった。

(散歩)

陽が空高く昇り，しだいに汗ばんできた頃，ヌルールちゃんとザナさんと散歩に出かけた。

家の裏木戸（鉄製）を抜けて，15mも歩くとそこはオートバイ屋であった。家の隣り棟が小さな商店街になっていた。日用雑貨店・電気屋・お菓子屋・床屋など十程の店が等間隔に並んでいた。強い陽ざしの中で店を見ると，どの店の中もうす暗く様子が解りづらかった。

ヌルールちゃんとザナさんが，オートバイ屋の店主らしき男性と話しをしている。

その姿を見てふと思い出す。

（さっき，ザナさんが買い物に出かけ，あっという間に帰って来た理由はこれだ！商店がすぐそこだったからだ。)

そんな事なのに，それに気が付いた私は，うれしくて思わず一人うなずいた。

サロンにTシャツ・ゴムぞうり姿の私をオートバイ屋が見つけ，こちらをジーと見つめている。

私は，オートバイ屋に近づいて，ヌルールちゃんとザナさんの後ろに立った。

不思議そうな目で私を見ていたオートバイ屋が，何やら「どこから来た人なのか？」と聞いている様子である。透かさずザナさんが「Jepun」ジュプン（日本）と答えたのが解ったので，続いて「Dari Jepun」ダリ・ジュプン（日本から）と答えたが，私のマレー語が本当に通じたかは，定かではない。しかし，オートバイ屋が笑いながら頷いたので安心した私であった。

地元の人々の不思議そうな視線を，幾度も感じながら歩いてる途中，子供達が道行く人々と挨拶を交すと，私もJALの機内で覚えた『「Apa Khabar」はじめまして』を連発した。サロン姿のこの私が，アパ・カバルとさりげなく言っているのかと思うと，いかにもそれっぽいかなぁと，自分自身に少し酔ってしまった。

菓子屋に立ち寄り，バナナチップを買う。

そして，緑が豊かな大きな広場に行った。

草地に，シーソーが2台，ブランコが3つ，スベリ台が1台，その広場の片隅に置かれていた。

じゃり道に面したその広場の入口には，高さ6m程の一本の名の知らない木があって，私達は，木影を求めてその下に腰を降ろした。そこは，今までの暑さを一気に忘れさせる程，

さわやかな風があって，とても涼しかった。汗で濡れたTシャツの裾を，両手で持って踊らせた。腰から背骨に側って首すじまで，冷たい空気が通りぬけた。

そして，煙草に火を点けた。

子供達は，そんな私を笑いながら見て，大きく開いた口の中へ，何枚もバナナチップスを運び入れる。

「フーゥ。」と煙草の煙を吐き出す私を見て，子供達は，白い歯を見せながら大声で笑った。

子供達が，何かゴチャゴチャと話し出したと思ったら，急に立ち上がり走り出した。

私は，煙草を口にくわえながら，その姿を目で追った。

キャーキャー言いながら，右へ左へと走り廻り，はるか左奥にあるスベリ台の下まで行くと，階段を一気に登り，滑り下りた。

子供達の楽しげな声が，私の耳にやさしく溶けこんだ，のどかなひと時であった。

（ジャングルの家へ）

午後，激しい雨音に目を覚ます。

昼食後，それぞれの部屋で昼寝をしてから，ハルンさんの友人宅へ向かう。

車を運転しながら，ハルンさんの友人イスマイルさんの事，イスマイルさんの家の作りの事を話してくれた。私は数ある話しの中で，なお一層，マレイシアに引き込まれて行く自分を感じた。それは，イスマイルさんの家が建っている場所と，そのスタイルにである。

ジャングルの中に家があり，その家はトラディショナルな家だと言うのである。

（マレイシア・ジャングル・トラディショナル・ハウス）

「そこには，必ずむかしながらの，本当のマレイシアの生活がある。」

私は，期待に胸を膨らませた。

舗装された国道を左に折れ，赤土のドロンコ道を数百メートル入った所に，イスマイルさんの自宅があった。

ヤシの木に囲まれた南国特有の家。

庭先の緑色したバナナの木やマンゴーが，私のイメージする南国を，尚一層現実のものにした。家の軒下では，ニワトリが勝手に歩き回り，部屋の入口には，黒いネコが横たわり耳を立て，目を光らせ私を見ている。

両開きになっている窓から，二人の青年が私を食い入るように見ている。家の中が薄暗いこともあって，やけに青年達の目が白く輝き，少しこわいくらいに見えた。

しかし，ハルンさんが木の扉を明け家の中に入って行くと，青年達はほほ笑みながら，私達を迎え入れてくれた。

二人の青年は，イスマイルさんの息子さんであった。

「Apa Khabar！Nama saya Enomoto」こんにちは，私は榎本です。と二人の青年に挨拶をする。何とも言えない程，私は緊張した。

今，考えてみると，きっと自分がイメージした南国マレイシアが，目の前に現実としてあり，自分自身がそこに入って行こうとする意識が，緊張を招いたと思う。

だから，聞いたはずの青年達の名前は，今でも思い出す事ができない。

テーブルに着いた私達に，主人のイスマイルさんがコピを持って現われた。

サロン姿に日焼けした顔，白い歯がやけに輝やいている様は，また私を，南国マレイシアに引き入れた。

互いに挨拶をする。

そして，コピの入ったカップを受け取り，再び席に着いた。コピを頂く。

歯にしみる程のあまさがここにもあった。

ここの家族は，二階の階段の上で白いイスラムの帽子を被り，丸い金ぶち眼鏡をかけ物静かに私を見下ろすイスマイルさんの父。階段の中程で，手すりに寄りかかりながら，私がそちらを向くと目をさけてしまう娘さん三人。大きな笑いが印象的で，お母さんと言う言葉が彼女の為にある様な，イスマイルさんの奥さん。八人家族である。

ここのお母さんは，日本人かと思われる様な顔立ちで，私は驚いた。

彼女は，私のことをニコニコしながらジーと見つめ，ハミダさんと何か話しをした。

きっと私の事を話しているのだと思い，私は「ふぅーん」と言う顔をした。

すると，下膨れ顔のこの私を，「ハンサム」だと言う。「どうして？」と私が聞くと，「肌が白くて綺麗。」だと言う。

私も，「お母さんも，エキゾチックで綺麗だ。」と話すと，家中が爆笑の渦となった。

本当に，そう思ったから話した私であったのだが，彼らは言葉のやり取りの中での，ギャグとして感じたのかもしれない。

イスマイル家族とハルン家族の会話が入り乱れる様に始まった。

私は，ぬるくなりかけたコピを飲みながら，窓の外に目をやった。

ヤシの木の下に，いつの間にかヤギが２頭いて，草をはんでいるのが見える。

赤い土，緑の草，青いヤシの木，そして白いヤギ，時間が止まった様な空間がここにもあった。

娘さん達が，テーブルに数々の料理を運んで来る。

「ラクサ」と言う魚のすり身を使ったスープのうどんを始め，ココナッツミルクと香辛料を使ったチキンの煮込み「ルンダン」など，マレイシアのオリジナル料理がテーブルを飾る。

楽しい食事が進むにつれて，イスマイルさんが，ハルンさんと何か厳しい顔つきで話しをしている事に，私は気がついた。

（何を話しているのだろう？）

そう思った私であるが，二人のマレー語は全く解らなかった。

食事をとりながら，解らない二人のマレー語に耳を傾け，笑顔を崩さない様にして，二人を見守った。

その時，イスマイルさんの両手の人差し指が，彼の胸元から前方に突き出されるのが見えた。……。

戦時中に日本軍兵士がとった行動について，二人が話しをしていたのだと，私は直感した。「虐殺」の二文字が頭に浮かぶ。

次第に，食事が喉を通らなくなった。

コピを飲む。

しかし，あの強烈な味は感じなかった。

「どうしたら良いのだろう？何をしたら良いのだろう？」

自分自身が，どうして良いのか解からなくなって，少しうつむきかげんになった。

「榎本さん，疲れた？」とハミダさん。

「いいえ。」と私。

イスマイルさんが，私の方を見ながら「もっと食べなさい。」と手で勧めてくれる。

私は「ありがとうございます。」と言って，コピを静かに口元へ運んだ。

お母さんが，これ以上無いという笑顔で，ルンダンの皿を私に勧めてくれたが，うなずくのが精一杯の私であった。

「僕は，本当にどうしたら良いのだろう。何を話せば良いのだろう。戦争の事を僕は謝らなければならない。どの様に謝れば良いのだろう。」そんな事を考え続けていた。

相変わらず，二人は話し続けている。

私は，後先考えずに思わず立ち上がり，「Minta maaf（許して下さい。）」とマレー語で謝り頭を下げた。

その瞬間，部屋中の音が消えたようになって，二人の会話も途切れた。

「その話は，もう50年も前のことだ。あなたの国日本へもアメリカ軍がいったではないか。マレーも日本も同じだ。」と，イスマイルさんは，英語で話しをしてくれた。そして続けて，「これからは，今まで以上に仲よくしよう。」とゆっくりした口調で語り，私をじっーと見つめた。

そして，暖かな目で微笑んだ。

思わず，熱くなって行く自分が，そこにあった。

（別れの朝に）

別れの朝，いつものように水浴びの音で目が覚めた。

「きっと今朝は，皆んな疲れているだろうなぁ。」とふと思う。

昨夜は，私も疲れた。帰宅した時間が午前２時。やはり皆んな疲れが顔に出ていた。

今日は，この家族と一緒にいられる最後の日。ヌルールちゃんのクリクリした瞳を見れるのも最後。シャリルちゃんの泣きじゃくる顔を見れるのも最後。ザナさんのケラケラと笑う姿も見れなくなる。

ハミダさんが，キッチンに立ち料理する姿も，もう見る事ができないかも知れない。

リビングで，ハルンさんと煙草をふかしながら，子供の話しをしたのも，今はもう良い思い出になりつつある。

今日，私はマレーの家族と別れる。

朝食の時，別れの挨拶をと思ったものの，いつもの様にワイワイ，ガヤガヤ話しながら食事が進み，あっという間に時が過ぎる。

一人一人への別れの言葉も，朝方まで考え続けた。

しかし，いつもの様なゆっくりした感じが無い。どんどん時間が過ぎ，家族の皆んなは出かける支度をしている。

「榎本さん，あなたもバッグの用意をして，車に乗って下さい。」とハミダさん。

私は部屋に行き，朝方準備したバックを持った。そして，何時間もかけて考えた挨拶文のレポート用紙を，きちんと小さく畳んで，それを左の胸ポケットに潜ませた。

部屋の中を，ぐるりと見回して，目の奥に焼き付けた。この部屋ともお別れ。

部屋を出て，リビングで家族を待った。

そこから見えるダイニングテーブル，さっきまで賑やかに食事をしていた。

子供達が走り回っていたこの床。

そして疲れ果て，昼寝をしていたこのソファーとも，別れが近づく。

楽しかった我家の思いが，頭の中で駆け巡った。

家族がリビングに集まってくる。

支度が出来たヌルールとシャリルは，はしゃぎながら，私の目の前をあっという間に通り抜けて，ガレージの車の中に消えた。

ハルンさん，ハミダさん，ザナさんが揃って現われた。

（この時しかない。）

私はそう思って，三人に声をかけた。

「ソファーに座って下さい。」

三人は揃ってソファーに腰を下ろす。

私は，胸ポケットに潜めていたレポート用紙を取り出し，丁寧に開いた。

そして，マレー語で書かれている家庭への別れの言葉を，ゆっくり丁寧に読み上げた。

子供達への言葉，ザナさんへの言葉と続けて読み上げた後，ハミダさん，ハルンさんへお礼を伝える。

短く簡単な文章ではあるが，私にとっては，思い出がいっぱい詰まった挨拶である。

次第に声も詰まり，言葉にならなかったかもしれない。そして，最後に日本語で「ありがとう。」と付け加えた。

三人は，ただ頷いた。

車に乗り込む。

ザナさんが，ガレージの扉を閉めて，最後に車へ乗り込んでドアを閉めた時，急に胸が詰まり悲しくなった。

車は，いつもの様に静かに，家を後にした。私は一度だけ振り返り，我家に目をやった。車は，いつもの通りを曲がると，国道に出てスピードを上げ，そして走り続けた。

一言も，話せない。

家族の皆んなも黙っている。

私は，ただ外だけを見つめた。

通り過ぎる，ヤシの木やゴムの木がぼんやりと霞んで見えて，話し始めた，子供達の声が，どこか遠くから聞こえてくるような気がした。

（空港）

昼食を済ませ，観光をしながらショッピングを楽しんだ私達は，初めて出逢った空港に向けて，車を走らせた。

車の中は，全員が大声を出して話し，そして歌った。マレイシアの歌，日本の歌，大合唱であった。特に，私達家族全員が知っている日本の歌「今日の日はさよなら」は，私達のドライビング・ソングになっていた事もあって，何度も何度も繰り返し歌った。

朝，家を後にした時の様な落ち込んだ雰囲気は，もうそこに無かった。

きっと，私の知らない所でハルンさんとハミダさんが相談して，盛り上げようと話し，歌い出したに違いなかった。

それは，運転するハルンさんが，幾度も私の横顔を覗き，私が歌っているといかにも安心した様子で，ニコニコしながら歌い続けていたからである。

車は，見覚えのある道を，逆方向に走る。

道幅の少ない通りから，植込みが美しい広々とした道に入った。

緑色の地に白ぬきの文字『Airport』が見えて来た時，私は歌う事が出来なくなった。「声を出そう。出そう。」と幾ら思っても，声がつまって出て来ない。

おまけに，また周りの風景が霞んで見え始めた。

「ここまで来て，カッコ悪い！」と思い，今一度元気を出して歌おうとしたが，到頭声が出なかった。涙がこぼれた。

空港の正面に車が横付けされた時，私は何も言えず車を降りた。

思い出のサロンを詰め込んだ思いバックを，トランクから取り出し，肩に掛け，一歩二歩と進む。空港ロビーの，ガラス扉が開いた。そこには，あの家の様な温かな雰囲気は，これっぽっちも無かった。

何もかもが忙しく動いていて，まるで今までが嘘の様に思えた。

私が，一歩先を歩き，後から家族が続いた。マレイシアに一緒にやって来た，仲間四人の姿を見つけた時，私は後ろを振り返り，ハミダさんに向かって「ありがとう。」と言った。しかし，声にならなかった。

彼女は，ただ頷いて，右手で私の左肩をポンポンとやさしく叩いた。

そして，前へ進むようその手を軽く押し出した。私は，一つだけ首を縦に振り，前へ進んだ。

私は，今にでも落ちてきそうな涙を，必死にこらえて歩いた。

搭乗手続きが済んだ時，家族との別れが訪れた。

私は家族に歩み寄り，最後の別れをする。

おちゃ目なシャリルは，笑いながら私の体を押した。

「ありがとう。テリマカシ」

歌の上手なヌルールは，握手した時小さな声で私に「テリマカシ」と言葉をくれた。私も「サマ・サマ」とお返しした。

ザナさんは，私がプレゼントした，キーホルダーをしっかり手に持ち，微笑みながら手を差し出した。

「ありがとう」

数々の思い出が，握手と共に甦ってくる。

ハルンさんと最後の握手。

「また，家に帰って来いよ。」

「はい！」

「今度は，奥さんと子供も一緒に連れておいで！」

「……。」

言葉が出ない。

ハミダさんとの最後の握手。

「……。」

「……。」

顔が見えない。見られない。

後から後から，涙がこぼれ落ち，私の頬を濡らした。
そして，静かに別れが訪れた。
ありがとう　皆さん。
さようなら　愛する人達。
さようなら　さようなら　私の大切な友達。
「マレイシアでの思い出」　大作　敬一

ペナン空港へはスバンからおよそ40分ぐらいでした。飛行機から見おろしたマレイシアは，緑におおわれた大地と青い海でとてもきれいなものでした。マレイシアにはまだ多くの自然が残されているのだなと感じたと同時に，今開発によって着実に破壊されている現実との間で複雑な気持になってしまいました。

空港に着くと多くのPAMAJAメンバーが出迎えに来てくれていました。私のホストである王さんも仕事の合間をぬって駆け付けてくれました。王さんは奥さんと２人の子供の４人家族で，とてもきれいな３LDKのマンションにお住まいでした。約300万円ぐらいで購入したと聞いて，やはりはるかに日本より安いなと思いました。

全員で昼食をとったあと，それぞれのホストで分かれ私は王さんの案内でKek. Lok. Siという仏教の寺院を見学しました。ペナンは想像以上に中国の文化が浸透していて，ここがマレイシアだということを忘れてしまうほどでした。

家に着くと最初少し緊張してしまいましたが，さっそく２人のかわいい子供たちとも仲良くなり，一緒にゲームをしたりして楽しいひとときを過ごすことが出来ました。

夜のWellcome Partyはマレーの文化を教えている学校のような所へ招待してくれました。初めてなまずを食べることも出来，マレーシア料理を思うぞんぶん満喫しました。

食事をしながらマレーの民族舞踊や音楽を鑑賞することが出来，特に，小さな女の子の踊りはとてもかわいらしくて，みんな食事そっちのけでシャッターを切っていました。

11時ごろ家につきシャワーをあびて寝ましたが，いままではホテルのクーラーのきいた部屋で寝ていたのでマレイシアの本当の夜はこれが初めてでした。扇風機を回していましたが，特に暑いとは感じませんでした。

朝は８時ごろ起きてシャワーをあび，近くの露店風のお店で食事をとりました。中国系の人たちは，朝食を外で食べるのがごく一般的なのだそうです。ここで食べた福建麺がうまくて２杯も食べてしまいました。(長崎ちゃんぽんのようなもの)

午前中はペナン一周のドライブをしました。海岸にはきれいなホテルが立ちならび，美しいビーチで多くの外国人を目にすることが出来ました。やはりマレイシアでも有数の観光地なのだなと思いました。バタフライガーデンでは園内狭しと無数の蝶が飛びまわり熱帯の気

分を味わうことが出来ました。

食事のあとヘビ寺へ行きましたが，ガイドの少年がヘビと写真が撮れると言ってしつこく追って来たのには閉口しました。やっぱり日本人と分かるのでしょうか。

２時間ほどでペナンを一周して午後からはジョージタウンへショッピングに出かけました。コムタという高層ビルの中に八百半があり，スーパーというよりも高級デパートの雰囲気で売っている物も結構高いなと思いました。休日のショッピングセンターは日本とまったく変わらない風景で多くの人であふれていました。

マレイシアで目に付いたのは，スーパーカブのような原付の仕事用バイクに，とても人気があるということです。また自動車もほとんどが日本車とマレイシア国産の「サガ」で，やはり日本の製品の強さのようなものを感じました。

夜はサヨナラパーティー出席のためペナン橋を渡って対岸のファウジアさんのお宅へ行きました。そこであたたかい歓迎を受け，カラオケで歌をうたったり，踊りをおどったり本当に楽しいひとときを過ごすことが出来ました。ただやっぱり驚くのは，マレイシアの人まったくお酒を飲まないということです。お酒が入らなくてもあれだけ陽気に楽しめるのはすごいと思いました。

ペナン最終日の朝は６時前に起きて朝日を見に海岸へ行きました。そこでは大勢の人がジョギングをしたり，特に中国系の人が多く一人でまたはグループで大極拳をやっていて，やはり中国の文化を色こく感じました。

朝食のあと子供たちが通っている仏教のサンデースクールへ一緒に行き，宗教に対するこの国の人達の深い信仰にふれることが出来ました。２泊３日という本当に短かい期間でしたがこの国の人達と心からふれあうことが出来てよかったと思います。特に私の場合は他のメンバーと違い中国系の家庭にホームステイしたということでまた別の面からマレイシアを見ることが出来たと思います。

マレイシアを訪れて一番思ったことは想像以上に豊かな生活をしていることです。そこには発展途上国というイメージはまったくありませんでした。それと同時に思ったことは奥深い所で，大きな人種間の対立があるということです。私たちの通訳をして同行してくれた，インド系のアティムーラムさんがつぶやいた「私たちインド系はここの国民ではありませんよ。」という言葉には，大きな衝撃を受けました。

2020年に先進国の仲間入りをするというスローガンがマレイシアにはありますが，この国の発展にはこの民族間の協力ということがかかせないと思います。

これから日本はマレイシアを経済的な側面から見るだけでなく，お互を理解しあい，人と人との交流をもっと活発に進めていくべきだと思います。そのために自分には何が出来るのか，深く考えるきっかけを作ることが出来た今回の旅でした。

「調査チームに参加して」　筒井　功

① 私は，昨年５月「21世紀のための友情計画」で来日した20名のマレイシア勤労青年の地方（高知）プログラムを担当しました。一週間の交流ではありましたが，準備の段階からマレイシアの国情，自然，宗教等についての予備知識を得ていました。

この度，このような形でマレイシアを訪問できたことは，誠に幸運であり，多くの人々との交流が今後の国際交流を深める貴重な体験となりました。

マレイシア到着後，PAMAJA メンバーの心暖まる歓迎を受けただけでなく，忙しい仕事を割いてまで調査訪問先へも同行してもらえたことに，深く感謝いたします。

今回の調査では，多くの政府機関の訪問を行い，この国の教育，産業，環境の行政担当者から直接コメントを聞くことができ，先進国への仲間入りをめざし，民生レベルの向上の意欲が感じられました。

ただ，訪問先の途上の車窓からかいまみられる状況からは，近代的なビル群やハイウェーといった都市生活文明とその麟から始まるゴムや椰子の農場で働く人々からは農村地域の後進性のギャップがあり，異様な状況でした。また，工場地域では日本からの進出企業が多く，日常生活における自動車，家電製品などは日本製であったことは，日頃テレビ・雑誌で見聞きしていても，やはり驚きでありました。

さて，このように日本からの経済進出が著しいなか，日本政府が経済技術援助や多くの海外青年協力隊の派遣等で多大の貢献をしていることは，マレイシア側でも感謝しているように思われました。しかし，日本人との交流や相互理解のための施設を見ることがなかったことは残念でしたが，日本製品が身のまわりに氾濫している状況から判断しても，もっと教育や文化への貢献といったソフトの面で支援する必要があるのではないでしょうか。

PAMAJA メンバーは，一月間の在日経験があり日本の文化と社会に触れており，帰国後も日本に対して人的交流だけでなく経済的な交流といった分野にまで熱いまなざしを向けています。このような期待に答えるためには，日本政府のきめの細かい援助と在マレイシア日本企業の支援がますます重要となってきているように思われます。

「21世紀のための友情計画」事業を今後も効果的に発展させ，来日で芽生えた日マ交流をさらに大きな木に育て上げるためには，日本側においても交流の窓口を持つ団体の組織化が不可欠ではないでしょうか。

② ホームステイ

ホスト　Mr. Abdul Rozak Bin Osman　36歳　ラザク氏（小学校教員）

奥さん（中学校教員），子供２人

2月28日（金）

11：30　ホストファミリーとの対面（於　バヤン・レパス空港）

12：30　ホストファミリーたちとの昼食会

13：00　ジョージタウンで買物

15：00　ラザク氏宅着（バタワース市）

休息

20：30　歓迎パーティ（ペナン島）

23：30　ラザク氏宅着

0：10　就寝

2月29日（土）

9：00　起床

9：45　朝食等

マレイシアおにぎり，野菜入りミートボール

子息アクマルの算数を教える

散策

11：50　ラザク氏らの経営するガソリンスタンドで友人のズキ氏（建築コーディネーター）と対面

13：00　ズキ氏の案内でペナン島視察

植物園，蝶園等

19：30　ラザク氏宅着

21：00　お別れパーティ出席（ファウジア氏宅）

ホスト　Mr. Fauziah M Noor　ファウジア氏

奥さん（ファリアナさん…　コーディネーター），子供2人

1：00　就寝

3月1日（日）

8：30　起床

9：00　朝食

散策

長女ファジアツル

11：30　ジョージタウン市内で昼食

13：30　市内ショッピング

14：40　ホストファミリーとのお別れ（於　バヤン・レバス空港）

③ ホームステイの感想

国際交流関係の業務に携わって11か月余り，高知県民と外国の方達との交流を図ってきましたが，今回初めて，ホームステイを体験することとなり，興味と不安が混ざりあった感情でいっぱいでした。

今回のホームステイは，ホスト側の都合で２か所で行うこととなりました。

最初のラザク氏のお宅では，夫婦共稼ぎで子供２人の世帯でありました。住宅は，約15畳の居間，６畳３間と台所・トイレであり，一昨年に400万円で購入したものでした。周辺の住宅も同様の建物が多く，田園のなかに住宅団地があり，自然に囲まれた環境でした。

マレイシアの人々の生活は，日本と比較して，穏やかにゆったりとしているものと考えていましたが，夫婦共稼ぎであったことから，休日は奥さんは家事に忙しく，またラザク氏もガソリンスタンドの経営，コンピューターの販売関係など多角的な仕事をしており，かなり忙しい様子でした。

朝食でいただいたマレイシアおにぎり，野菜入りミートボールは近くの食料品店で買ったもので，日本の家庭と同様の面が身受けられたのは，驚きでした。

翌日にお世話になった家庭は，私たちのお別れパーティーの会場となったファウジア氏のお宅でした。残念なことにご主人は仕事の関係で不在でありました。しかし，奥さんのファリアナさんと２人のお嬢さんが歓待してくれ，短い時間ではありましたが，思いでの残る滞在となりました。

両方のお宅に共通することは，子供たちがまるで昔からの友達のように親しくしてくれ，緊張している私をほっとさせ，そこの両親たちとの交流がスムーズになったことでした。

7. 提言

マレイシアの東方政策は，日本・韓国などの労働倫理や経済哲学，技術を学びマレイシアに応用し，工業経済の発展と近代化を加速させようとするもので，マレイシア人事院の東方政策を担当する部所が招へい青年の人選窓口となっている。このため，この東方政策思想を根本にした人選をしている。マレイシア政府は，この政策によりマレイシアの近代化のために大きな役割を果たさせようと考えていることもあって，帰国後の青年達の活動成果に期待をしている。

しかし，政策は主にマレー系国民のために実施されている様側面もあり，中国系国民から

は不満の声も聞こえてきている。事実，招へい青年のほとんどはマレー系である。
（人口比　マレー系46.8%，中国系34.1%　インド系9.0%）

また，この東方政策実施についてマレイシア単独の判断で行なっているわけではなく，アセアン各国と相談しつつ実施しているということを政府関係者より聞かされた。我々が今後交流を深めていく上で，相手国を通してアセアン全体の事を考えていくことの重要さを感じさせられた。

PAMAJA（同窓会）活動は，組織力，行動力共かなり力を持っており，また人事院が側面から支援をしていることもあって活発に活動をしている。これは，東方政策をより推進させるためと考えられる。そのためか，PAMAJA の会員は，訪日した青年だけでなく，この活動に感心のある希望者は入会出来ることも東方政策の一環ということを伺わせる。そして，活動領域についても，東方政策促進の為であれば規制をあまりかけている様子はないようだ。

このため，日本側で考えている同窓会という組織イメージではなく，PAMAJA を基盤にして日本との経済交流活動にも発展する可能性を秘めている。

第二次世界大戦において，マレー半島に侵略した日本軍隊によって1942年３月マレイシア国内数十ヶ所において，数千人のマレイシアに住む中国系住民の虐殺行為が行なわれた。その内のひとつヌグリスンビラン州マンティンでは1942年３月22日，200人あまりの人が日本軍によって虐殺された。1985年日本における教科書問題を契機に建てられた慰霊碑を訪れた。そして，その霊を慰めるとともに平和への努力を誓った。

このような中国系国民の過去の事情について，マレー系国民は無関心なのか，このことに触れたくないのか，明らかではないが，案内をしてくれたマレー系の青年は，現地の中国系の人達と我々との話合いの中に口を挟むことはなかった。何れにしても，この国の民族的な問題の二重構造を感じさせられた。

今後，日本と様々な交流が見込まれるが，相手国の社会的な問題のバックグウランドを理解し，その社会に生きる人々の心情を察しながら交流を深める事の重要さを強く感じた。そのためには，相手国の人々が言葉や態度では伝えることの出来ない，本音の心を我々がどれだけ掬い上げられ，アセアンなどの国際社会で如何に行動出来るかが，今後の国際的な相互理解，協力を推進していく者としての課題ではなかろうか。

フィリピン

平成4年1月14日～1月23日

社団法人　日本国際生活体験協会

1.調査チーム派遣概要

1－1　調査チームの構成

	氏　　名	生年月日	性別	（上段）現住所（下段）所属先
チーム・リーダー	大和田浩二	昭28年10月31日	男	〒400－04 山梨県中巨摩郡甲西町荊沢 〒852－4 山梨 YMCA 主事 地方プログラム事務担当者
メンバー	横瀬　幸男	昭28年3月6日	男	〒179 練馬区田柄2－17－30 憲心館（空手） 共通プログラム武道演技者
メンバー	村上　朋子	昭30年9月27日	女	〒923－01 石川県小松市江指町甲25 ウィングス・ジャパン（自営） 合宿セミナー参加青年
メンバー	腮尾　城子	昭10年7月10日	女	〒940 新潟県長岡市鋳3－3－65 米穀商（自営） ホストファミリー
メンバー	菊池加代子	昭25年5月12日	女	〒183 府中市四谷3－52－23 ㈳日本国際生活体験協会 中央実施団体担当者

1－2　調査日程

日順	月　日	曜	行　程
1	1月14日	火	10：00　成田発　マニラ13：20着フィリピン航空431便 JICA 事務所
2	15日	水	午前　フィリピン帰国青年と本計画の打合わせ 午後　フィリピン外務省、 歓迎夕食会
3	16日	木	午前　マラカニアン宮殿見学 午後　サンチャゴ要塞、サン・オーガスティン教会見学
4	17日	金	午前　フィリピン大学訪問 午後　皮革工場視察（マリキナ地区）
5	18日	土	午前　自主研修 ナヨン・ピリピノ（フィリピン文化村）見学
6	19日	日	ホームステイ（セブ島）
7	20日	月	ホームステイ
8	21日	火	ホームステイ
9	22日	水	タガイタイ地区農場視察 Farewell Party
10	23日	木	08：30マニラ発　成田13：25着フィリピン航空436便

1月14日（火）

10：00　AM　成田発（PR431）

2：10　PM　マニラ着　JICA 増田職員の出迎えでホテルインターコンチネンタルへ

4：30　JICA 事務所　大川職員よりブリーフィングを受ける

1月15日（水）　マニラ

10：00　AM　JICA 事務所で PAJAFA スタッフと打ち合わせ

1：00　PM　昼食（フィリピン料理店「ビストロレメディオ」）

2：30　フィリピン外務省表敬

7：00　歓迎夕食会　（フィリピン料理店「ジョセフィーヌ」）

1月16日（木）　マニラ

10：00　AM　マラカニアン宮殿見学

12：00　PM　昼食（中華料理店「クウィーンガーデン」）

2：30　イントラムロス（城壁の町）見学

＊サンオーガスティン教会，カーサマニラ，サンチャゴ要塞

1月17日（金）　マニラ／ケソン市

10：30　AM　フィリピン大学訪問（国際センターにてブリーフィング及び大学構内見学）

12：30　PM　昼食（フィリピン料理店「トレリス」）

2：30　皮革工場視察（マリキナ地区）

1月18日（土）　マニラ

午前　自主研修

1：30　PM　ナヨン・ピリピノ（フィリピン文化村）見学

1月19日（日）セブ島／ホームステイ

8：00　AM　マニラ発　（PR831）

9：05　セブ市着　コーディネーターのインダイの出迎えをうける各受入家庭と対面，インダイの両親の家で歓迎昼食会後，各家族と聖ニーニョのお祭り見学

6：30　PM　夕食（「シーフード・シティ」レストラン）

1月20日（月）　セブ島／ホームステイ

終日　各家族とともに　チーム全員，マクタン島のハドソンビーチへインダイの家でさよならタ食会

1月21日（火）　セブ島

9：00　AM　セブ市旧市街地見学（サンペドロ要塞，マジェラン・クロス等）

家族とお別れ昼食会（「シーフード・シティ」）

1月22日（水）　マニラ／ダガイタイ

6：05　AM　セブ市発　（PR830）

7：00　マニラ着

11：00　ダガイタイ地区訪問

＊カノ・ブルー・スクリーン農場視察

1：30　PM　タール湖とタール火山を眺めながら昼食

タガイタイ・レジデンス・インにて名物の牛肉料理

7：00　PM　さよならパーティー（中華料理店「翠園酒家」）

1月23日（木）

8：30　AM　マニラ発（PR436）

1：10　PM　成田着

1－3 主要面談者

JICA 事務所	飯島　正孝　所長
	大川　晴美　職員
PAJAFA メンバー	Ms.Mary Louise Catherine Saldana(President)
	Mr.Vinci Villasenor(Vice President)
	Ms.Eva Lawas(Treasurer)
	Mr.Dennis Del Rosario(Public Relation Office)
	Mr.Alain Maulion(Board Member)
	Mr.Linus Chaves
	Mr.Tito Bundang(Legal Counsel)
	Ms.Michelle Logarta(Media Relations)
	Mr.Jovie Narciso
フィリピン外務省	Mr.Marciano A.Paynor,JR
	(Special Assistant Office of Undersecretary,Tomas R.Padilla)
	――「21世紀のための友情計画」前ディレクター
	Ms.Belmonte Cora
	(Director,Northeast Asia Division,Office of Asia & Pacific Affairs)
	――同計画新ディレクター
フィリピン大学国際センター	Ms.Alma G.Tirona（留学生プログラムスタッフ）
皮革工場（マリキナ地区）	Ms.Chiko Martini（工場経営者）
カノ・ブルースクリーン農場	Mr.Fred Aman（農場経営者）

2.　調査の要約

帰国青年同窓会（PAJAFA）のスタッフメンバーが，バンコクでの AJAFA 会議をひかえて忙しいにもかかわらず，われわれ調査チームのために，毎日の同行便宜をはかってくれた。帰国青年との交流についても，同様に予想以上の数の青年たちと会うことができた。

担当窓口である外務省をはじめ，フィリピン大学やマリキナの工場訪問等は，比較的ゆったりとした日程ではあったが，それぞれについて十分に理解を得ることができた。これも同行してくれた PAJAFA メンバーの努力の賜物であったと感謝している。

特に印象的だったのはフィリピン大学での講話であった。貧困地区での住民の意識改革やハンディキャップ施設での実習等を含む社会福祉コースに学制の関心が集まっているという

ことで，次回受入れプログラムの企画の参考になった。

また一方，フィリピン側の受入れについては，PAJAFA は今後ますます相互交流のための体制整備に取組むということである。日本青年の受入れについても，ホームステイを中心としたプログラムの充実が期待できるという意味で，調査チームの目指す方向に意見が一致していて良かった。

3. 現地活動報告

3－1 表敬訪問先における意見交換内容

(1) JICA 事務所

飯島所長より，「21世紀のための友情計画」の当地での評価や業務の進歩状況，及びフィリピン事務所の役割と協力活動についての説明を受けた。本年度はフィリピングループに不幸な出来事はあったものの，プログラムの評価は高く，更に良くしていく方向で努力したいとの説明があった。また，フィリピン外務省からも人選は更に厳正にしていくことが伝えられているとのことであった。

「21世紀のための友情計画」プログラム担当の大川晴美職員より，今回のアフターケア調査チームの日程概要，PAJAFA との協力体制そしてフィリピン，マニラ，そして特にこれから滞在するインターコンチネンタルホテルのあるマカティ地区の様子等について懇切丁寧なブリーフィングを受けた。

マカティ地区は，ホテル，デパート，マーケット，レストラン等が集中している繁華街で，夜おそくまでにぎわっている大商業地区である。

現在シャングリラホテル，コンドミニアム等が続々建築中である。まわりに建っている広大なお屋敷には高い塀がはりめぐらされており，大金持ちの人々が優雅に暮らしている。日本車，ドイツ車が多く，アメリカ車もあるがほとんどが中型以下である。ジープニーとトライシクルが一般の人々の足として最も多く利用されている。

(2) フィリピン外務省

本年１月に「21世紀のための友情計画」担当ディレクターが交替したので，新旧両ディレクターと当プログラムの体験者でもある外務省職員と面会した。参加者の90％が，異文化，言語の異なる国での体験は今後の国造りに大変役立つと高い評価を与えているということで，プログラムの成功している状況を聞いた。

今回のチームメンバーは，地方プログラム担当，合宿交流ボランティア青年，ホストファミリー，共通プログラム武道演技者，実施協力団体の担当と，全員立場が違っていたので，

それぞれの立場からのプログラムへの関わり方や感想を述べた。

ペイノール前ディレクターは，プログラムはあと２年だが，PAJAFA と協力して更に良いプログラムにしていくよう努力し，継続して第３次計画もぜひ実施することになればうれしいとの期待を述べていた。

現在，本当の意味での相互交流を目指して，PAJAFA メンバーが中心になり，日本青年の受入れプログラムを検討中とのことである。フィリピン滞在費はフィリピン負担，往復航空券が日本人参加者負担という方向で実現できればとの希望があった。

PAJAFA や AJAFA 等，「21世紀のための友情計画」プログラム参加者の同窓会の存在やその活動状況について，もっと相互に情報交換できる機会があれば，交流もよりしやすくなるのではないだろうかと，チーム側から提案した。

(3) フィリピン大学国際センターについて

フィリピン大学国際センター（UPICA —— University of the Philippines International Center Association）の責任者アルマ・G・ティローナさんより，フィリピン大学及び留学生センターの概要の説明を受けた。

現在当大学で勉強中の留学生は379名で，（内28名が日本人留学生）その中の11名がセンターの寮に滞在していた。地域開発，アジア学，社会福祉学が留学生に人気のコースとのことだった。

同センターでは留学生がフィリピンでの生活に早く慣れるように，カウンセラー制度や交流プログラムを作り，留学生の監督官庁への提出書類作成や規則の説明・アドバイスといった必要なサービスの提供をしている。センター事務局には現在スタッフが３人おり，大学の国際関係学部と連絡をとりながら留学生の世話をしているが，この寮生の世話を中心としたセンター全体の維持には，計16人の職員が働いている。

このセンターは，ロックフェラー財団の援助を受けて1965年に完成し，現在寮は３つで，４番目が間もなく建設される予定である。いずれも独身者用の宿舎のみで，２人用（１ヶ月１人当たり800ペソ，台所は共用）と３人用（同900ペソ，各部屋に小さな台所，冷蔵庫，オーブン付）がある。同国の人同志でかたまらないように，そして異文化に触れる機会が得られるよう配慮して部屋作りをしているとの説明だった。大学の教室だけでなく，身近な毎日の生活を共にしながら違った国や民族について学ぶことのできる寮生活は，異文化体験や交流の最良の場でもあるという考えは，世界共通なのだと再認識した。

大学の休暇期間には，フィリピン大学のコースをとっている場合に限り，寮の部屋を一時的に貸している。

生活・文化により早く慣れるためにと，ホームステイを希望する学生も多いが，通学可能

な範囲内で十分な家庭を探すのは，はやりどこの国でも難しいのが現状である。

また，フィリピン大学では，社会福祉や地域開発コースに"Research Extention Service"という現場訪問や実習の単位があり，関係官庁や私的期間，企業などと密接な連絡をとりながら実施されている。又，援助し，改良し，しっかり組織するべき地域での Commity Service や，貧困地域やハンディキャップ施設での社会福祉員実習が多い。日本では老人ホーム，老人介護や一人暮しの老人宅への訪問などの老人・老後問題が，深刻になっているが，宗教や文化的な要因からか，フィリピンでは最低6人（両親と子供4人）かそれ以上の大家族で暮らすのがふつうで，日本のような老人問題は少なく，従って老人ホームのような施設も少ない。学生たちは，むしろ教育関係の施設や貧困地区での意識改革を中心としたボランティア活動を主としたソーシャルワーカーの実習を希望する場合が多い。生活・文化そして宗教感の相違により日比両国がかかえる問題の種類がこんなに違うものなのかとあらためて感じた。

(4) カノ・ブルー・スクリーン農場（タガイタイ地区）

メトロマニラから1時間ほど南下すると，まわりはすっかり稲や野菜，パイナップル畑などの田園地帯になる。刈り取った稲を積み上げた水田の隣に田植えが済んだばかりの水田があり，その向こうに青々とした稲が実りの時期を待っている。フィリピンでは田植えと刈り入れを1年中くりかえし，多期作とでもいうのだろうか，水田を休ませることがないため，いつでも容易にお米が手にはいる。フィリピン料理にはお米をつかわれるものが多く，味の濃い料理とともに，必ずといっていい程お皿いっぱいに白いご飯を食べるのもうなづける。ここの米は，日本で食べるご飯にとてもよく似ており，フィリピン料理はわれわれ日本人にも，とても馴じみやすく，どことなくホッとするところがある。

ほとんどまっすぐな道路をひたすら南に走り続け，コーヒー生産で有名なバタンガスを過ぎ，タガイタイ地区にはいると間もなく，『カノ・ブルー・スクリーン農場』に到着した。経営しているのは，沖縄出身の日本女性を妻に持つフレッド・アマン氏である。「カノ」とはフィリピンの俗語で，白人全体を指す「アメリカーノ」の略称である。アメリカ人ではないが，確かにアマン氏は白人であった。

この農場では野菜とハーブの栽培が中心でマニラ市内マカティ地区のペニンシュラホテルやマンダリンホテル，またエルミタ地区のヒルトンホテルやマニラホテルなどの三つ星クラスの6つのホテル，デリカテッセン1軒と6つのレストランを主な取引き先としており，シェフから直接注文を受けた野菜やハーブを栽培している。

水をたっぷりとはった水盤で発芽させ，双葉に育つと，土の苗床へ植えかえ，更に数セン

チメートル育った時点で，ビニール製の小さな植木鉢へ植えかえる。ここまでだいたい3週間位。最後にビニールハウス（といっても年中温暖なので，ビニールでなく網をはってある）に移して出荷できる大きさまで育てる。見せていただいたのは，レタスの栽培過程だった。日本ではすでに一般的になったこの野菜の栽培方法は，フィリピンのように年中温かく，特別な工夫をしなくても自然にまかせて植物が育ち，容易に実りが手に入る国ではとても画期的な方法であった。アマン氏はこの方法で，注文に応じた種類と量の新鮮な野菜を，期限を守っておさめ，信頼を得ている。エンダイブ，レタス，ピーマン，チコリ，ラディッシュ，レモングラス，スターシウム，パレラ，何種類かのオレガノなどが栽培の中心である。

無農薬と愛情をもった栽培を信条とし，1983年に2ヘクタールの土地で栽培をはじめ，2年後から販売を開始，経営拡大に投じた莫大な借金も5年で返済した程，大成功をおさめた。現在では住居周辺を除いた大部分の土地をリースして野菜を栽培しているが，相変わらず自分で成長具合を見てまわるとのことで，目の前で抜いてお土産にくださった大きなカブは，ほんのり甘く，暖くやさしいアマン氏の愛情の味がした。野菜ばかりでなく，動物を育てるのも，料理や陶器をつくるのも，やはり何でも心をこめて作り上げることが成功の秘訣であるとつくづく感じた。

農場をあとに，まっすぐな道路を約20分南下して，『タガイタイ・レジデンス・イン』に到着した。途中，大きな牛肉の塊をたくさんつるした屋台が並ぶ，にぎやかなタガイタイ市場を通った。

標高700mに位置するタガイタイから眼下に見えるタール火山は，世界で一番低い火山で，周囲45kmのタール湖の中心から顔を出している。最後の噴火は1965年で，周辺の2つの村がこの噴火で全滅した。タール湖は水分滋養が豊かで，養魚産業がさかんであり，またタール火山の土壌も肥沃なことから，湖の周辺地帯の農業もさかんとのことだった。ふつう火山の周辺というと白っぽい灰色の岩肌がごつごつとあらわれ，地面があっても農業には適さないが，眼下に見えるタール火山周辺は，確かに深い緑におおわれ，こちら側の山との間の谷は，喬木が豊富な緑の葉を広げていた。

ここタガイタイはメトロマニラから車で1時間半ほどの距離で，標高が高いので涼しく，名物の牛肉をはじめ，新鮮な肉や野菜，魚介類も容易に手にはいり，景色もよく，山をくだって1時間以内に南シナ海に面する美しいビーチに行くこともできるので，リゾート地として脚光を浴びてきているとの説明だった。つい最近日本の企業がこのレジデンス・インの近くのホテルを買い取り，この土地で初めてのカジノを開いたので，これからますます人が集まるだろうとの話である。周辺にはまだまだ牧草地のような土地が広がっていたが，建築中の大きな別荘が何軒か目についた。山でも海でも美しい景色と少しでも広い土地が得られそうな場所に，ホテルやレジャーセンターを建ててしまう日本のことだから，この建築中の別荘

の中にも，日本人のものもあるかもしれないと，つい考えてしまった。

3－2　帰国青年同窓会の活動状況

現在の帰国青年同窓会（略称 PAJAFA）の会員は約1000名（実際に活動しているのは400～500人）である。年会費は50ペソ（約250円）と少額なため，すべての活動費をまかなうというわけにはいかない。JICA，日本及びアセアン国政府，日本における協力青少年団体が企画・実施するプログラムの促進と協力を主な目的としている。特に「21世紀のための友情計画」プログラムでは，出発前の現地オリエンテーションを担当し，日本についての説明や注意事項，またフィリピンからの参加者同志だけではなく，アセアン６ケ国からの参加者との友好継続のための独自プログラムも企画・実施している。

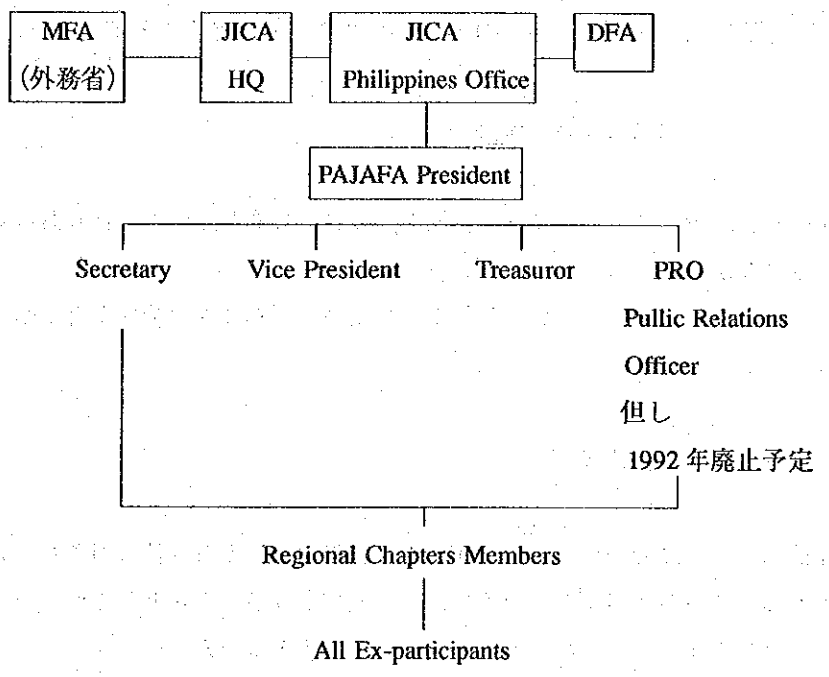
1990年，91年とグループには不幸な事件があったので，フィリピン外務省での人選を厳しくし，また JICA や日本大使館の指示・アドバイスをあおいで，厳しいスクリーニングと余裕のあるオリエンテーションを通して，1992年には，最高クラスの参加者を送りたいと，PAJAFA 会長のキャサリン・サルダーナさんが心強い決意を語っていた。

昨年10月には，アセアンと日本についての展覧会を実施し，写真，絵画等で活動の様子やフィリピン文化の紹介をした。更に11月には，AJAFA（アセアン６ケ国と日本）との合同活動として，インドネシアでユースキャンプを実施，今後の友好や交流を深める活動について話し合ったそうだ。このような AJAFA との合同活動については，毎年１月の合同幹部会議で協議するとのことで，今年は１月23日・24日にタイで開かれた。

また翌年の方針や活動計画は，12月に JICA と外務省の担当者が協議することになっている。

スタッフメンバーにはジャーナリスト，弁護士，教師，ビジネスマン，建築家，芸術家と各自が忙しい職業を持ちながら，ボランティアでこれだけの年間スケジュールをたてて，こなしていく熱意と努力に感銘するとともに，国際社会におけるフィリピンの明るい将来を見る思いがした。

以下はPAJAFAの組織図。



今までは，活動がマニラ中心になりがちだったので，今年からは地域支部の拡大に力を入れて，次のようなPAJAFAの活動拡大につなげたいと，サルダーナ会長が抱負を述べていた。

1）フィリピンの文化・生活を知ってもらう方法として，1週間から10日間のホームステイ・プログラムの実現
2）資金調達のために，企業への資金援助を呼びかける
3）専門分野別，会員名簿作成――「21世紀のための友情計画」プログラム・オリエンテーションに利用する
4）現在活発な，セブ島などの13地区での同窓会支部を形成
5）JICAプログラムの日本出発前オリエンテーションの実施
6）ニュースレターを発行し，参加者同士の連絡に活用する
7）災害地への救済事業の実施
8）アフターケアチーム滞在中の日程調整および同行
9）JICAプログラム参加者の反省会の企画と実施
10）3つの異なる分野の講義を企画・実施（「日本のビジネスマン」，「文化交流」等）

更にサルダーナ会長は，会員が海外で学ぶ機会があれば，学び，体験してきたことを，人々

に知らせたり，技術の導入や火山，台風地震等の災害救済事業に積極的に協力していきたいと話していた。日本の青年たちも，こういった熱意と迫力をもった世界の青年との交流を深めて，更に見聞を広め，真の意味での日本の国際化の実現をめざすことが大事だと実感した。

3－3　セミナー・交流会実施状況

帰国青年の居住地域がメトロマニラから遠く，多島に分布していることもあって合宿セミナーは計画されなかった。

しかし，さよならパーティーという名目での交流会は，約30人の参加を得て楽しく開催できた。中になつかしい顔もあり，話がはずんだ。

3－4　ホームステイ実施状況

日本出発前は，セブ島でのホームステイは1月18日（土）から3泊計画されていたが，18日が年最大のお祭りの前夜祭になるために，どうしてもフライトがとれなかったので，翌日早朝便でマニラを出発し，21日にもどる2泊3日に変更となった。

受入れ家庭は，コーディネーターのインダイさんの家を含めて下記の3軒であった。リカモラ家はインダイさんの実家，オポルト家はインダイさんのお母さんの妹，つまり叔母さんの家で，両家から「21世紀のための友情計画」プログラムへ計5名参加している。いわば“21世紀のための友情計画ファミリー”といえる。家族全員が日本に対して非常に関心が高く，親日家だったため，各家庭でのメンバーたちとの情報交換や交流もとてもスムーズにいき，メンバー全員のすばらしい体験となった。詳しくは「調査チーム参加者の感想」を参照。

ホームステイ家庭

大和田浩二　Dr.John Sidney S.Ricamora
横瀬　幸男　1989年 Working Youth で参加（Indastry）
#　　# 9 − 3 rd St. Happy Valley Subd.,Cebu City,6000
　　TEL：5 −42−97
　　Mr.Henry S. Ricamora

村上　朋子　Mr.&Mrs.Sofio&Yolanda Oporto Soyo Farms,Talambau,Cebu City, 6000
　　TEL：8 −13−86
　　Ms.Maria Julieta S.Oporto
　　1986年　Students A で参加

　　Ms.Jasmine S.Oport
　　1987年　Students B で参加（リーダー）

腮尾　城子　Mrs.Filipinas S.Ricamora － Rojo
菊池加代子　（1987年　Students A で参加）
61T.Breslin St.,VillaAurora,
Mabolo,Cebu City6000
℡：9－30－47

4　訪問国における青少年団体の活動状況

今回は日程上，青少年団体の活動状況について調査，訪問等はしなかった。次回の企画で補足・充実していただくよう期待したい。

5　青年招へい事業に対する相手国側の評価

一言で要約すれば，例年通り高い評価をうけている。

外務省訪問の際，ペイノール前ディレクターは過去の経緯をふまえ，参加者の帰国報告をみても依然としてプログラムに対する評価は高く，大変意義深いとの解説が冒頭からあった。プログラムに対する具体的な注文は特になかったが，その後も友好的雰囲気の中で訪問を終了することができた。

第３次計画へ向けた継続希望は，依然高いとの要望も話の中ででた。

6　調査チーム参加者の感想

「アフターケア調査チームに参加して」　大和田　浩二

まずはじめに，「21世紀のための友情計画」平成３年度アフターケアチームの一員として，フィリピンを訪問する機会を与えられたことに感謝したい。

今回のメンバー５名の内，４名は初めてのフィリピン訪問であり，チームとしては新鮮な感覚で，それぞれにフィリピンの実情と来日青年達との友好親善をはかれたことは，同国への理解が大いに深まり，当初の目的達成には十分効果があがったと信ずる。

以下に，私個人の感想を中心に，いくつか項目を取り上げて話してみたい。

1.　チーム構成メンバーについて

今回の５名のメンバーは，私，大和田は地方協力団体コーディネーター，村上氏はかつて

の交流青年，鰓尾氏はホストファミリーとしてそれぞれこの「21世紀のための友情計画」に深く関わってきている。また，横瀬氏は武道のデモンストレーターとして，共通プログラムで活躍しており，菊池氏は中央実施協力団体のプログラムコーディネーターとして，この計画発足当初より関わっている。

異なるプログラム分野の代表の参加は，アフターケアの目的や再交流のための理解促進には，バランスのとれた良いグループであったと思う。男性２名，女性３名という組合わせも効果的であった。

この「21世紀のための友情計画」の発足以来，いかに日本の各地域において受入れられ，いろいろな人々によって支えられてきたことか，そしてこの度のチーム訪問で多くのフィリピン青年達と知りあえたことは,，私にとって誠に大きな収穫であった。

2. PAJAFA 及び AJAFA について

帰国青年同窓会（PAJAFA）は，現在1000人以上のメンバーがいるにもかかわらず，実際に活動しているのは半数以下で，会の主な運営資金がメンバーの年会費しかない現状ではどうしても資金不足になりがちだそうだ。また7000あまりの島々に青年たちが点在していることもあり，組織としての活動が限られてしまいがちとのことで，今後は地方支部の組織強化をはかり，活動の活発化をはかりたいとのことだった。

今回われわれを受入れるにあたり，大変献身的に協力してくださった PAJAFA スタッフの皆さんと会い，帰国青年たちの日本に対する思いは想像以上に深く，他のフィリピンの人々に比べてはるかに好意に満ちていると強く感じた。さよならパーティーでは，更に多くの PAJAFA メンバーやその友人達と会い，自分たちが体験したり見聞した日本を紹介し，青年たちの相互交流プログラム等の様々な活動を通して，フィリピンと日本の人々が更に良い関係を築いていくために努力し，活躍しているのを知りとても心強く思った。

また，シンガポール，マレイシア，タイ，ブルネイ，インドネシア，フィリピン，日本の国々で構成されている AJAFA は，PAJAFA のいわば上部組織にあたり，かなり活発な活動を行なっているようだ。今年タイのバンコクで開かれる AJAFA の代表者会議に，会長を含め３名の PAJAFA 役員が出席する予定とのことだった。AJAFA 主催の青少年キャンプは，毎年アセアン各国の青年たちがたくさん参加し，友好と相互理解に大きな役割をはたしているとのことで，「21世紀のための友情計画」が，日本国内における受入れプログラムのみに完結せず，アセアン諸国を中心とした青年たちの友好促進に寄与していることを再認識した。

今後，JICA をはじめとした色々なルートを通して，こういった AJAFA のプログラムについて，日本の青少年団体等に情報が流されることが強く望まれる。

3. フィリピン外務省との懇談から

訪問前は，表敬訪問程度に理解していたが，「21世紀のための友情計画」担当ディレクターの方々との懇談がすすむうちに，かなり具体的な内容の話ができ，大変有意義であった。とりわけ，当プログラムが日本への一方的な受入れプログラムに終わらないようにしたいとの思いは，担当ディレクターはじめ外務省の方々の間にも強く，PAJAFA や AJAFA に対する期待の大きさを感じた。

われわれから提案として出された，日本青年のフィリピン訪問グループ受入れの具体案については，PAJAFA の組織を中心として対応を考えていきたいとの，ディレクターの前向きな回答を得ることができ，大変ありがたかった。

フィリピン青年を受入れた日本のホストファミリー等，主に地方受入プログラムの関係者の中に，フィリピン訪問の希望が多く，このディレクターの回答は大変心強く，励みとなった。フィリピン訪問の希望者は，今後ますます増えていくと思われるので，情報提供システムの整備が急務と感じた。

4. ホームステイについて

われわれ一行は，セブ島のセブ市に在住する PAJAFA メンバーの家庭でホームステイをした。横瀬氏と私がお世話になったリカモラ家は娘１人と息子５人の６人兄妹の内，４人が「21

世紀のための友情計画」プログラムでの来日経験者だった。広く美しい庭と部屋がいくつもある大きな屋敷を構える一家には，現在両親と，下から2番目で歯科医のシドニーさんだけであった。

セブ滞在中，特にお世話になったのは，このシドニーさんと，彼のお姉さんでわがチームのホームステイのコーディネーターであるインダイさん，そしてかれらのいとこたちであった。

セブは，古い歴史を偲ばせる場所があちこちに見られ，メトロマニラとは全く異なった印象をうけた。また，背の高いヤシの木に白砂の浜辺，そしてすき通った青い海という，まさに絵にかいたように美しいリゾート地でのホームステイを，われわれは心ゆくまで楽しんだ。

インダイさんをはじめ，受入れ家庭の皆さんの心やさしい配慮と暖いもてなしに心から感謝したい。

5. フィリピンの人々との交流について

マニラでもセブにおいても，PAJAFAメンバーを中心にたくさんの方々の大変厚いもてなしを受け，大きな感謝を胸にフィリピンを後にした。この心優しく暖かいフィリピンの人々とあちこちで目にした美しい風景とは対照的に，都市の町で垣間見た数多くのバラックや，道路にとび出しては車の窓にしがみついて，真夜中までお金をせがんでいた幼ない子供たちの姿が，眼にしっかりと焼きついている。

この厳しい現実を前に，われわれができることがいかに小さく，限られているかをひしひしと感じながらも，より以上に友好と交流を積み重ねていくことの重要さを心の底から感じずにはいられなかった。

アフターケア調査チームに参加して，今後とも「21世紀のための友情計画」地方プログラム担当者として，更に相互理解を深め，友好を促進するべく協力していきたいとの決意を新たにした。

横瀬　幸男

1月16日

朝10時ホテルを出発，スケジュールを少し変更して，マラカニアン宮殿に向かう。今日は，日本語のガイドが案内してくれるとの事，ホテルから約30～40分の所にマラカニアン宮殿があった。入口には，警備員が何重ものチェックをしていて，カメラ等は全部入口に預けなくてはならない。

宮殿の中は，マルコス時代を思わせる色々な物が展示されていて，その美しさ，またスケールの大きさに，皆驚かされていた。約45分で見学コースは終了したが，全部見るには3倍ぐ

らいの時間がかかるそうだ。

12：00に昼食のため，中華レストランクィーンガーデンに行った。8人でたらふく食べて，ビールも飲んで，990ペソ（約5000円)。日本と比較すると，とてつもなく安い。そのうえうまい。

お腹もいっぱいになったところで，近くの果物屋に寄ってみた。バナナ，マンゴー，パパイアなどの他，見たこともない南洋のフルーツがきれいに山積みされ，売られていた。一瞥すると，どのフルーツも値段はとびきり安い。

2：30　マニラのスペイン領時代に造られた町をたずねる。

まず，サン・オーガスチン協会，入場料は20ペソ（約100円)，中庭があり，スペイン建築によく似ている。

次に，カーサマニラ（マニラの家）を見学する。入場料は15ペソ（約75円)。スペイン領時代の代表的建築らしく，広々として優雅で，個人の屋敷だったが建物内部に小さな礼拝堂もあり，非常によくできていた。

3：00　ホートサンチャゴへ。入場料は2.5ペソ（約13円）と安い。門など外壁の部分の破損はひどいが，海に最も近い位置にあった水牢など，大戦時代の生々しい様子が，そのまま残されていた。

4：00　セブ島へ行くためのチケットを受取りに旅行社へ行った。

以上で本日は終了。

1月19日

早朝，5時起床。

我々はセブ島で，2泊3日のホームステイをすることになっていたので，その準備にとりかかる。

2泊分の荷物だけを持って，8時30分発のセブ島行，B737に乗り込む。

どんな家にホームステイするか，いい家にあたればいいなとか，色々考えるが，考えても仕方がない。

セブ空港着。なかなか暑い。これはマニラより暑いぞ。空港には，ホームステイコーディネーターのインダイさん（PAJAFA メンバー）が迎えに来てくれていた。

我々は2台の車に分乗して，ステイ先の家へと向かう。

男性2人と女性2人と1人の3つに分かれて，ステイ先に落ち着いた。我々は男性2人は医者の家へ，女性たちはその娘と，奥さんの妹さんの家にそれぞれステイすることになった。

早速，町へ出る。

町は年一回のフェスティバルで，にぎわっていた。

人通りが多く，又，暑くて歩くのにも大変な思いをした。

その夜は，インダイさんやステイ先の人たちとフィッシュセンターで食事をした。自分の好きな魚介類と野菜を選んで，調理法を指定して料理してもらうレストランで，なかなかのものだ。

グッド・テイスト！OK,OK また来よう！

家に帰ってから，レントゲン技師でもあるおとうさんと息子のシドニーさん，そしてシドニーさんの婚約者とともに，日本とフィリピンの事について熱心に話しあった。とくにシドニーさんは，日本に来た時のことを，何冊ものアルバムを開きながら，こまかく話してくれた。その中には，私と一緒に撮った写真が数枚あり，とてもなつかしく思った。

日本武道館での演武を良くおぼえていて，その時の様子やすばらしかったとの感想を聞き，うれしかった。

２日目に，隊員全員とシドニーさん，そしてそれぞれのステイ先の家族３名の計９名でビーチへと向かった。海辺でのフィリピン料理のランチは格別なものだった。

午後から，大型のバンカというボートを借り，島めぐりをしながら海水浴としゃれこんだ。すばらしく気持ちがいい。

日本の海とは全く比べものにならない程，水が澄んできれいだ。サンゴが見え，ウニやヒトデがいた。船頭さんが，海にとびこみ，たちまちにして20～30個のウニを取ってきてくれた。その場で殻をとり，海水で洗ってもらい，さっそく味わう。うまい！取りたてのウニの味は格別だった。忘れられないフィリピンの海になった。

夜はインダイさんが家で，全隊員のために夕食会を開いてくれた。インダイさんは医者で，なかなか広い家に住んでいる。芝生の庭にはプールもあり，この庭での屋外パーティである。食事は中華風であった。残念なことにみなアルコールを飲まず，ビールが出なかった。せっかくの食事なのに。残念。

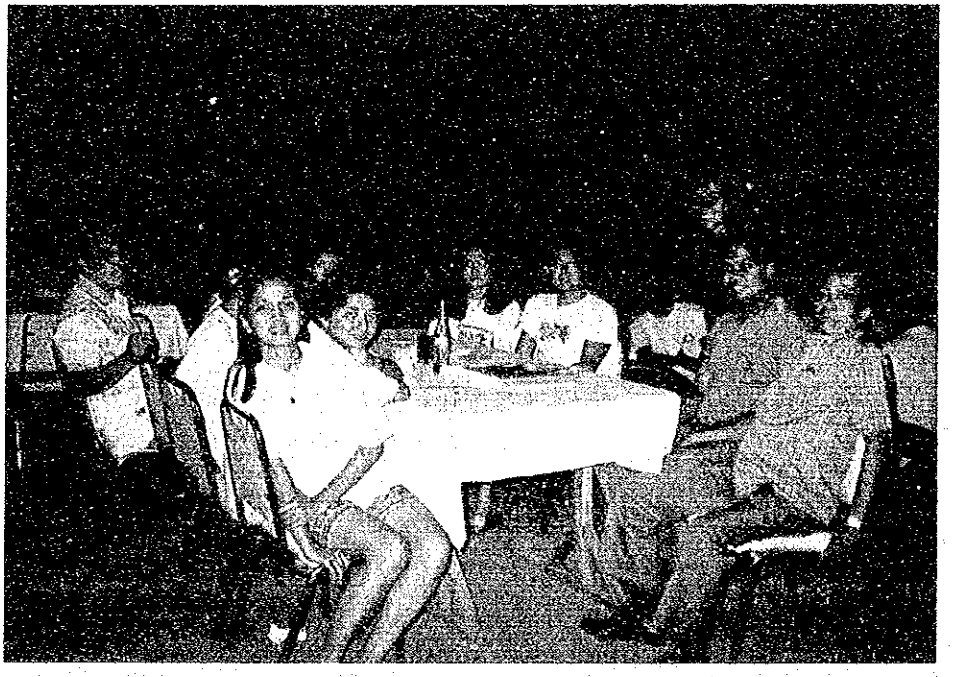
パーティに来ていたホストファミリーの人たちから，空手を教えてほしいとのリクエストがあり，ようし，とばかり４～５人を相手に手ほどきをした。これがまた，みななかなか熱心で真剣だったので，私の方もだんだんと力がはいった。なごやかで楽しいパーティーだった。

今回の訪問で感じたことは，私が思っていたフィリピンとは大分違っていたということである。

人々はとても親切で，メトロマニラでも治安も，聞いていた程には悪くないと思った。食事は何でもうまいし，物価も日本に比べるととても安く，なかなか住みやすそうだ。やはり，その国へ行ってみなければわからないことばかりである。

今までのように，アセアン青年を招へいすることも大変結構だが，一方的にならないように，アセアン諸国へも日本青年を派遣し，もっと相互交流をはかるべきだと，強く感じた。

経済大国といわれる日本ならば，日本が全額負担して青年の派遣プログラムを実施してはどうだろうか。



「フィリピン大学国際センター（UPIA）を訪問して感じたこと」　村上朋子

特に感じたことを以下に記す。

UPIA は，ケソン市ディルマンのフィリピン大学の広大な敷地内にある。責任者の Alma G.Tirona さんにお話を伺った。現在28人いる日本人留学生には，やはり社会学，社会福祉学，アジア学などが人気のマスターコースである。

文化や国情の違う各国留学生をあずかる施設であるため，各種手続や配慮が必要で，そのため十分なオリエンテーションを行なっているそうである。なんといっても町の中へ出かけて直接土地の人々とのスキンシップをはかることが，一番生活慣習，ことばに慣れる早道だそうで，学生たちにすすめているという。

留学生としてマスターを習得するには，最低2年以上滞在するようで，この間にフィリピン語のコミュニケーションもかなり上達するようである。「日本人学生は現地語の習得は早いですよ」といわれ，何だか身内を褒められたような気になり嬉しくなる。フィリピンの言葉と言えば，英語の中にタガログ語が混じっているという感じで，英語なしではフィリピン

の言葉は成立しないのだろうか，と疑問に思っていたのだが，ここでAlmaさんから，近年，母国語を大切にしようということで，1998年から専門科目はフィリピン語で講義がされるようになる，ということを伺った。英語圏からの留学生にとっては，また大きな障害となるのは明らかであるけれど，大切な事であろうと思った。

お話を伺っている間に，創価大学から交換留学生としてフィリピンに来ている若松さんが，ちょうどセンターへ帰って来たので紹介して頂く。私たちがお話を伺った場所は，ドーム型の小ホールのようになっており，このホールを囲んで，テレビのある部屋，卓球台のおいてある部屋などがある。どこへ行くにもこのホールを通るように設計されている。若松さんもこのホールを通って，自分の部屋へ引き上げて行った。

UPIAを出るとジープニーに乗りこみ，大学構内を一回り。本当に広い。農学部もあるそうで，馬，牛，やぎの姿も見かけた。私たちの後に乗って来た人が乗車料金を渡すのだが，ジープニー初体験の私たちはどうするのかわからずにボケッとしていると，順にドライバーに手渡すように教えられる。おもしろい。大学のシンボルである像の前で記念撮影をしてから，昼食をとりに構内のレストランへ出かける。同行してくれているPAJAFAのミッシェルは，学生時代にはよく来たそうである。

食後，ミッシェルが自分の家が近いから，そこでコーヒーを飲もうと誘ってくれた。ミッシェルの住んでいる町の入り口には，ガードマンが詰めていて訪問先をいちいちチェックしていた。町内会のようなシステムが，自分たちの町を守るためにお金を出して運営しているそうである。ミッシェルの家の隣が売りにでていていた。中を見せてもらってびっくり。プールつきで部屋が5つも6つもあって，すべてトイレとシャワーつき。メイドの部屋もある。これでこのあたりの普通の家だというから，日本ってほんとに豊かな国なのだろうかと，思わず考え込んでしまった。

ミッシェルの家で一休みした後，マルキナバレーの靴工場の見学に出かけた。このあたりは革製品を作っている小さな工場がいくつも集まっている地方である。

見学させていただいたところは，ガンホルスターとベルトなどを作って，主に軍に納入しているという。ベルトは頑丈そうで，デザインもシンプル，おまけに信じられないくらい安かった。工場とは名ばかりの小さな小屋の中で，3人の職人がそれぞれの作業をしていた。賃金は週単位の出来高制で，一つのデザインは一人が全工程をこなしていた。この工場は，仕事を始めてまだ半年程しか経っていないそうだが，置いてあったミシンのフルさが目についた。フィリピンでは何でも器用に修理したり，作り直したりして使える限りは使うのが当たり前となっているそうである。省資源（リサイクル）がしきりに叫ばれている今日，かつては日本でも当たり前だったことが，新鮮な驚きとして映るのは正常な感覚なのだろうか，とつい考えてしまった。

ホームステイ体験記

セブ島ではコーディネーターのインダイのおばさんの家，オポルト家にお世話になった。この家の４女のジュリエットは，学生のグループの時に日本へ来ており，２男のジョエルも日本へ来たことがあるという。５女のジェラは，昨年応募したのだが，職場での経験がまだ短いので選ばれなかったという。本人よりお母さんの方が，ジェラにも日本を訪れる機会を持たせたいとしきりに言っていた。国は違っていても親の思うことは，どこも一緒なのだなあと感じた。

ところで，フィリピンでの土地の広さについては，公園，大学，普通の人の家と，マニラですでに免疫ができていたつもりだが，この家は丘の上にあるというより，丘すべてが敷地という広さで，普通の日本人の常識からみて，私は本当に驚いてしまった。丘にはいろんな果樹が育っており，庭から取って来た新鮮なマンゴーやパパイヤを朝食に出していただいた。マニラでもところどころに果物がなっていたけれども，この家はもともと果物を栽培する農家なので，ことさらおいしくいただいた。手をかけて栽培した果物やジュースで歓迎されるという幸運にはそうお目にかかれないだろう。

その上，この日はセブ島でちょうどお祭りがあり，メンバー一同インダイの両親の家に集合して，見学に出かけた。翌日は，またみんなで海に出かけとても楽しかった。

わずか２日間の滞在でもあり，ほとんど出かけっぱなしで，お父さんとお母さんとは話をする時間は朝食の時だけ。しかし家族総出のおもてなしには本当に感激した。

フィリピンは確かにいろいろと問題を抱えた国である。しかし，本当に日本が豊かで，フィリピンは貧しいと言えるのかどうかは疑問である。物質的な面だけではない。例えば時間通りに運行する日本の列車は確かに自慢できるものであろう。しかし，すべてがきちんと決められた通りに進んで行くことを優先させるあまりに，何かが起きたときにどう対処するかを，私は知らないような気がする。何が起きても不思議でないフィリピンでは，小さい子供も自分の頭と体で毎日をたくましく生活している。フィリピンを訪れる機会があって本当に良かったと思う。フィリピンを自分の目で確かめることができ，フィリピンの友人が次に来日する機会には，もっと友好親善に役立てると思う。そして，このプログラムで日本を訪れた若者たちも同じように，日本の良い点，悪い点を眺め，同時に自分の国を眺めてくれるとすれば，本当に素晴らしいことだと思う。また，マニラでの最後のさよならパーティーで，リーダーの大和田氏が普通の人たちの交流こそ真の相互理解につながると挨拶されたけれど，本当にその通りだと心から思った。

またいつか必ず訪れたいと決心した。

腮尾　城子

何事も自分の目で見，肌で体験することが一番と思い，今回のアフターケア調査チームへの参加を決意したのだが，家事が何もできない主人を残し，10日間も家をあけるということがどんなに大変か，ずい分悩んだ。

こうして1992年「フィリピンアフターケア調査チーム」の一員として，それぞれ異なった立場で「21世紀のための友情計画」にかかわっている４名の皆さんと共に，フィリピンを訪問する機会を持つことができ，大変幸せに思う。

初めてのフィリピンということもあって，期待と不安を胸にマニラ空港に降りたった。車窓から見るマニラの市街地には，高層ビルがたちならび，人と車がふれていた。バスやタクシーも走っていたのだが，何といってもジープニーの多いのにはおどろいた。ジープニーはその名の通り，ジープを改造した一種の相乗りタクシーで，車体に派手なペインティングをしたり，個性豊かな装飾をしている。手を上げるとどこでも乗せてくれ，下りる時は天井をトントンとたたくだけでいい。これがこの国の人々の主な足となっている。又バイクや自転車の横に座席を付けたトライシクルという三輪車も多い。どこへ言っても色あざやかな南国の花が咲きみだれ，牛や馬や羊等がのんびりと草をはんでいる。出会う人々は，皆明るく親切だった。

帰国青年同窓会のメンバーであるミッシェルさんとジョビーさんの案内で，マニラの国際空港の隣にあるナヨン・ピリピノ（フィリピン文化村）へでかけた。豊かな自然を取り入れた，広々とした公園で，フィリピン国を構成する６大地方――タガログ，ビコール，ビサヤ，ミンダナオ，山岳地域，イコロス――の特色を生かした高床式やバンブー製の移築住居や，海を模した大きな人造湖が立体的に展示されていた。園内にあるナシン博物館には，色彩かでエキゾチックな各種の文化遺産が陳列されており，又各地方の展示場では，地方色豊かな民芸品を買うこともできる。園内を走るジープニーは無料で，広い公園内を楽々と移動でき，とても便利だった。湖には所狭しとハスが浮かび，水牛がのんびりと水浴びをしていた。

私達は二手にわかれて，遊覧用のバンカーという，フィリピン独特のボートに乗りこみ，湖を一周した。湖畔にすわっていた現地の子供達が，私達を見てかたことの日本語で，「ガンバレー，ガンバレー」と手を振って応援してくれた。

広い芝生の広場では，家族連れや恋人達，小学校の遠足で来ているのか，子供達がたくさん走りまわったり，寝そべったりしていた。アイスクリームのおじさんが鈴を鳴らしながら通り過ぎ，まるで物語の中にいる様に，穏やかで平和な光景だった。

今回の訪問で，私が一番楽しみにしていたのは，セブでのホームステイであった。日本では，すでに何十人も外国の青年たちを受け入れ，ホストファミリーとしての体験はかなりあ

る方だと思っているが，ホームステイをするのは初めてなので，フィリピンの家族や家とはどんなであろうかとの興味とともに，ホームステイの体験者としての立場から，気がつくことや学ぶことがたくさんあるだろうと，期待もしていたのである。

私のホストマザーは帰国青年同窓会のメンバーで，昨年結婚したばかりのインダイ・リカモラ＝ローホーさんだった。インダイさんは内科医で，市内の病院に勤務していて，大きな家にお姑さんとお義姉さん夫婦と一緒に暮していた。別棟にはメイドさんや運転手，庭師とその家族が住んでいる。広い庭にはプールがあり，ブランコやベンチ等が置かれ，日本ではとても考えられない広さだった。芝生のきれいに手入れされた庭には，犬ばかりでなく，ニワトリも放し飼いにされていた。

この日セブではお祭りがあり，観光客も大勢来ていて，せまい町は人であふれていた。

フィリピンの各島からパレードに参加している人々は，派手なコスチュームやメーキャップをして，南国特有の明るく，激しい太鼓のリズムにあわせて踊り狂っていた。

家族の案内ででかけたシーフードレストランでは，新鮮な海の幸に舌鼓をうった。スーパーマーケットとレストランがいっしょになったようなお店で，売店で客の好きな材料を選び，調理方法を指定してその場で料理してもらう。何でもあると思われる日本から来た私たちにとっても，珍しいレストランだった。味は中華風フィリピンといった感じだが，とてもなじみやすく，おいしくいただいた。

又，ハドソンビーチへも連れていっていただいた。海辺での昼食の時，家族が用意してくれたフィリピン料理のお弁当の中に，おもしろいものを見つけた。1～1.5㎝幅に裂いたココナッツの葉を三角形に編み，中にお米を入れて炊いたもので，私の住んでいる新潟のチマキにとてもよく似ている。こちらのお米はパサパサで，とてもおにぎりにはできないと思っていたが，このチマキスタイルにすれば，お弁当としてどこへでも手軽に持っていける。また調理した肉や魚もバナナの葉にきれいに包んであった。私は急に，フィリピンの人々に親しみを感じた。今度わが家に青年を受け入れる時には，ぜひチマキを作ろうと思った。お国の料理を思い出し，私が感じたように，日本により親しみをもってくれるかもしれない。

エメラルド色の海は遠浅で，底まで見える澄んだ水は美しかった。エンジン付のバンカーで島々を遊覧し，取りたてのウニを賞味した。すべてが初体験で印象深い思い出となった。

私たちの滞在していたインダイさんの家で私たちチームのためにガーデンパーティーを開いてくれた。デリバリーの食事サービスの人たちがテーブルやイスを運びこみ，ビーチから帰ってきた時には，すでに料理万端整っていた。親戚の人たちも間もなく到着し，一族そろっての夕食会が始まった。肩を抱き合い歌ったり，記念写真を撮ったりして別れを惜しんでくれた。

2泊3日の短いホームステイであったが，親切で陽気なフィリピン気質に触れ，たくさん

のすばらしい思い出ができた。家族や親戚をあげての暖いもてなしや，気をつかわせないように心配りをしてくださったことに，とても感動した。この自然な心遣いと青年とともに生活を楽しむことがホームステイ成功のかぎであることを，今回のホームステイを体験してますます強く感じた。

マニラでの最後の夜のさよならパーティーで会ったたくさんの同窓会のメンバーも，日本でのホームステイが貴重で，楽しい体験として，今でも心に深く残っていると話していた。

これからも，楽しく，思い出深く，そして身近な「日本」や「日本人」に触れる機会として，1人でも多くの青年たちにわが家でのホームステイを体験してほしい。

「ホームステイの感想」　　菊池　加代子

1月19日（日）いよいよホームステイ地のセブ島へ向かう。フィリピンでは国内空港でも，航空券がない場合はチェックインロビー内にも入ることができない。セブ島行き831便は8時出発だが，7時には出発ロビーはいっぱいになり，7時30分にはロビー内で日曜ミサが始まった。人工の93%がクリスチャンの国とはいえ，空港まで神父さんが出張し，15分のミサをあげるのを見て，その熱心さに驚いた。しっかり寄付金を集めているのを見ると，資金集めのためには神父さんといえども東奔西走しているのだなと，妙に感心した。

ほぼ定刻に離陸した飛行機がセブ島に近づくに従い，眼下は青緑色の海に変わり，機内からでも海底がわかる程水が透き通っている。ホストファミリーに会える楽しみと緊張感でドキドキしてきた。

リゾート島として，今や脚光を浴びているセブ島の空港にしては簡素で暗いロビーを抜けると，明るい日の光の中で，“JICA AFTERCARE”のサインを持ったコーディネーターのインダイさんが，にこやかに出迎えてくれた。

私は腮尾さんといっしょにインダイさんの家でホームステイすることになった。他のメンバーはインダイさんの実家といとこの家とのことで，昼間はチーム全員で活動する予定とのことだった。

インダイさんは現在医者として市内の病院に勤めるが，まだ学生だった1987年に「21世紀のための友情計画」プログラムで来日経験があり，マニラでの現地オリエンテーションから，東京，山口でのホームステイなど，帰国までの全プログラムの写真や資料が分厚いアルバム5冊に，きれいに整理されていた。これらのアルバムが大事にしまってあり，体験や感動の一部始終をこと細かに語ってくれるのを聞いて，このプログラムがインダイさんの人生にとってどれだけ意味のある体験であり，かけがえのないすばらしい思い出となっているかを知り，そしてこのプロジェクトが参加青年に与える影響がいかに大きいかを改めて感じ，プログラ

ムコーディネーターとして身のしまる思いだった。

昨年9月15日に結婚したばかり，中国人のご主人は医大の同級生だった。たまたまマニラ出張と重なり，今回はお会いできなかったが，南のザンボアンガから仕事でインダイさんの家に同居している，ご主人のおかあさんとお姉さん夫婦に会うことができた。

29 才の新婚家庭にしては，寝室5部屋，2つのソファーセットと10人用のダイニングテーブルがゆったりと置かれている大きな居間，広い玄関ホールとダイニングキッチンのある平屋建て，更にプールがあり，結婚披露パーティーを開いたという，50人以上はゆうに集まれる広い庭付きの新居は，経済大国といわれる日本でもなかなか見ることはできないだろうと思う。2人とも医者である上に，両方の実家が医者と実業家で，地位も名誉も教育もある上によく働くからだろうと思う。のんびりとした田舎の風情があるセブ市郊外の住宅街だが，屋敷のまわりを高い塀で囲み，門は大きくて頑丈な厚い木でできていて，常にしっかり鍵がかけられている。家事と食事と庭用の使用人とドライバーを雇っていた。

到着日の19日には聖ニーニョのお祭りにでかけた。フィリピン各島から参加する華やかなパレードを見ようと，各国，各島から集まってきた人々で，通りばかりでなく両側のビルの屋上までびっしりと埋まっていた。子供たちはみな，あちこちの屋台で売っている聖ニーニョや伝説的英雄の人形ペンダントを首から下げていた。痛いほどの日差しや趣向をこらした極彩色の衣装，ぼーっと見ているとすぐにはぐれてしまう程の人ごみの中で，氷の誘惑に勝てず，フィリピン名物ハロハロというかき氷とパフェをあわせたようなデザートを食べた。数日間の滞在にもかかわらず，ついに胃腸も氷に慣れたのか，おなかをこわすこともなかった。

翌日は地元の人たちに人気のあるといわれるマクタン島のハドソンビーチへでかけた。平日のためか砂浜に人はまばらで，日本の海水浴とはずい分イメージが違う。青緑の海や暑い日差し，ブーゲンビリアに囲まれたあずまやとリゾート気分いっぱいの1日だった。

夜はインダイさんの自宅でガーデンパーティを開いてくれた。中華料理のケータリングサービスを利用したとのことで，テーブルセットから，調理，サービスから片づけまで一切うけおい，ホスト・ホステスがずっとお客様とすごせるし，レストランに招待するより多くの人を招待でき，安いのが魅力とインダイさんが説明してくれた。

帰る日の午前中は，生きている歴史といわれるインダイさんの叔母さんの案内で，セブの歴史的な部分の見学をした。

ほんの3日間ではあったが，家族，親戚をあげて心からみてなしてくださった受入家族の皆様には，心から感謝している。

最後に今回のフィリピン滞在で感じたことをまとめました。

帰国前夜に開かれたさよならパーティーでは，1988年と89年の参加者を中心としたほとんどの PAJAFA スタッフメンバーと会うことができた。プログラム参加当時大学生だったメン

バーがほとんどだったが，現在では社会の各方面で活躍し，PAJAFA の組織をさらに固め，活動を充実していこうという意欲と熱気が全員から感じられ，今後の友好，交流活動が注目される。

メンバーの１人が話してくれたが，限られた人々にしか受けられない高い教育をうけた女性の社会進出がめざましく，大統領をはじめ，副知事や官公庁の局長クラス，弁護士，大学教授，医者とかなり広い分野で活躍しているとのことだ。彼女たちの能力や意欲が高いこともあるが，社会や職場での実力が正当に評価されていることや家柄も大きな要因となっているようだ。

一方，あちこちの路上でたくさん見かけた物売りの小さな子供たちのように，毎日食べるために働き，経済的に教育を受けられない人数の方が何倍も多く，さらに十分な職場がないために失業率が異常に高く，若くて健康な青年があちこちの街角でぼんやりと立っているのをみかけた。教育に最大の予算をとりたいというフィリピン政府の記事を実感した。

１家庭の子供数が１～２人で，経済的にも教育施設にも恵まれているように見える日本の青少年が，かえって家族，友人関係が希薄で孤独だったり，深刻になりつつある老後の問題なども，大家族や人と人との繋がりを大事にし，相手の事を常に考えようとするフィリピンの人々や社会から，解決方法をさぐれるのではないだろうか。

のんびりとではあるが，少しでも滞在を楽しんでもらおうとするフィリピンの人々の，このもてなしの心に触れ，プログラムーコーディネーターとして，互いの国や社会のことを知る上で最良の，日本青少年との交流の機会を少しでも多く提供するプログラム作り，また不測の事態にもあわてず対処できる日程作りを心がけたいと思う。

ホテルやレンタカーの手配，情報やアドバイスなど細かい心遣いをいただいた JICA 事務所の大川職員はじめスタッフの皆様や，全プログラムを企画して下さり，ホームステイ以外の全期間同行し，案内して下さった PAJAFA メンバーのミッシェルさんとジョビーさんに心から感謝申し上げます。

7　提言

ホームステイの受入状況で，３泊の現状から２～３泊増やせないかとの要望も再々聞くが，限られた日程の中での調整と，日本での受入実体を考えあわせると，一泊程度の期間の延長は，場所，時期によっては可能なところから実施することを希望する。

テーマグループの構成メンバーについては，なるべく分野にそって選ばれることが望ましい。